マイティ・トール ～ブリテン・フォーエバー～

ぷに丸4620

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

汎人類史、ひいてはカルデアと言う世界を生きながらえさせるため、〝大いなる意思〟によって、生み出され、そして滅ぼされた妖精國ブリテン。

一人の少女が願いすら叶わない哀れな世界。

その物語を覆すために現れた存在によって変革していく物語。

だがそれは、世界を滅ぼす力を以てしても、あるいは滅ぼすことしかできないからこそ容易には変えられない運命で。

これは、妖精國というどうしようもない世界を本当の意味で救うため、あいする者達を救うため、奔走する青年の最後の道筋。

ブリテンよ、永遠に。

＊＊＊

こちら。世界観や主人公の設定を週刊少年マガジンで連載していた『ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ～奪還屋～』を参考に、ＭＡＲＶＥＬのＭＣＵ版を元にした世界観をクロスオーバーさせている作品となっております。

拙作である『世界を敵に回しても』のトゥルールートにあたる物語になります。

こちらを読まなくても大丈夫なようにしてありますが、気になった方は読んで頂ければ幸いです。

目次

最後のお話 ―― 1
役割 ―― 14
誰かを救おうと言うのなら、その方法を間違えてはならない。44
カミナリ ―― 55
本当のはじまり ―― 71
盲信者 ―― 95
運命が壊れる音 ―― 110
壊れ始めた運命 ―― 124
１４００万６０５回目 ―― 148

最後のお話

「死ぬってなんだろう……」

モヤ一つすら無い天井。

ホコリ一つない床。

白を基調とされた部屋で、部屋と同じように真っ白な服を着た少年が呟く。

言葉の内容は少し暗いが、歳の頃は１０にも満たない少年。

そう言ったことに興味を持つには当然の年齢とも言える。

例えば、部屋に備え付けてあるモニターで死生観を語るような番組が放映されたりなどすれば影響されてつい呟いてしまう事もあるだろう。

「死んだら人って救われるのかな？」

その言葉自体に恐ろしさはない。ありがちな話だ。

だがそれを呟く少年のどこか空虚な気配が、本当に答え次第では死んでしまうのでは無いかという恐怖を思い起こさせる。

「クス――」

そんな中小さな笑い声が上がる。

「死、ですか……」

そんな未熟ゆえの疑問を放つ少年の問いに、笑顔で応える者が1人。

「中々面白いお話だ……」

これもまた白。

部屋や少年に負けず劣らず。

汚れ一つない白衣を着込むのは成人の男性。

「なぜそのような事を？」

だが、その男性にえも言えぬ深淵の黒を感じるのは彼の漆黒の長髪が原因なのか。

「死ぬことって最低で最悪なことだと思うんだ。でもテレビとかだと死んだ方がマシ。とか死が救いだとか。そう言うことばかり言ってるから」

「ほう、救い……ですか」

先生。

と呼ばれる長髪の男性は子供の戯言と切り捨てず。

ベッドに腰掛ける少年の傍らにあるチューブなどが付いている機械に手を翳す。

そのチューブの先には少年の腕あった。

「ニュースでも言ってたよ。自殺者がまた増えたって……」

「……」

男性は答えない。
少年の言葉の続きを促すだけ。

「先生はどう思う？　死ぬってなんなのかな？」

「――定番の解答は出来ますが、それはきっと、貴方の望む答えではないでしょう……」

笑顔のまま、男性は無難な回答を返す。

その答えに不満を持ったのか。
少年は一呼吸入れた後、また一つ問いを重ねた。

「じゃあ、もう1人の先生はどう思うのかな？」

その問いに、男性の呼吸が変わる。

「――クス」

その含み笑いに怖気を感じるのは気のせいだろうか。
機器を弄る手を止め、男性は少年のベッドテーブルにある端末を一瞥する。

その視線の鋭さは先程の浮かべていた笑顔からは考えられないほどのもの。
敵意は全く無いものの、その圧力は常人であれば怖気を感じるほど

である。

しかし少年は気づかない。

幼さ故の無知がそうさせるのか。

あるいは幼いながらもその迫力に耐えられるだけの胆力を持ち合わせているからか。

「また面白い事を言いますね……もう1人の――ですか」

「うん……」

悪言いながら端末の画面に視線を移す少年。

もう1人、とは果たしてどう言う意味なのか。先生、と言う単語が役職である以上普通に考えてしまえば言葉通り、別の人間の事を言うのだろうが、そういった意味ではないのは2人の空気から察せられることはできる

「……『運び屋』の先生ならどうかな?」

そんな彼を見ながら、長髪の男性は、またクスと笑い。

「さて、何ぶん私は死を想像することができませんので……」

「それでも、聞きたいな……」

けむに巻こうとする男性に尚も食い下がる少年。
意地でも聞き出そうとする少年のその態度はもはや単純な興味と言う領分を超えているようにも見える。

「ではこうとでも言っておきましょう」

男性は、柔らかく笑いながら。

少年のその問いに。

「他人事」

そう答えた。

＊＊＊

「ぐ……っぅ……っ」

夥しい痛みの奔流。

「が……あぁぁぁっ！」

首を斬られた。
頭を潰された。
足から順番に切断されて輪切りにされた。
火をつけられ身体を燃やされた。
四つん這いにさせられ、歩かされながら刃物を滅多刺しにされた。
ありとあらゆる死と尊厳の陵辱が頭に流れてくる。
一体何度、一体いつまで、続くのか。
痛みは慣れているが流石に億劫になってくる。

でも、それでも、もっと最悪なのは――

「――ハ……っ！」

目が、覚めた。

「ハァ、ハァ！」

悪魔でも見ていたのだろうか。
息は苦しいし、気分は最悪。
背中に感じる硬い感触はお世辞にも快適とは言い難い。地面に寝こけていたらしい。
寝ぼけた頭で定まっていなかった焦点が合わさっていく。仰向けのまま見上げた先は一面の星空。
――ドクン

「――っつ！」

頭が痛い。
夢見が悪いらしい時は決まって起きる頭痛。

「――っ!!」

痛みを抑える為に頭を抑える。

「ハァ……っハァ……っ！」

呼吸が自然と落ち着いていく。
それと共に頭に情報が流れてくる。
俺は、俺はこの世界を■■■たm――

「俺は……っ！――えっと、僕は……」

そう、思い出した。名前はマトだ。本当はマトじゃないんだろうけどそう言われてる。

『お前、人間の癖に全然気分も良くならない。反乱軍の失敗作の方がまたマシだ』

理由は皆を楽しませるためのマトと言う役目を与えられたから。

ここは妖精の支配する國『ブリテン』

僕は異世界から来た人間で、チェンジリングと言うらしい。

ここが妖精國で、母親である女王モルガン様が治める國だと言う事はこの村に来る前、色々とあった時に彼女から聞いた。

本当の名前の記憶が無いのはこの周辺に蔓延する霧がそういう作用をもたらしているからららしい。

ここが記憶を失っている地域だと言う事はあの娘が教えてくれた。

「綺麗だ……」

痛みも治まり、立ち上がれば空を見る余裕も出てくる。

星の数だけを言うのならもっともっと多くて綺麗な空を見たことがある気がするがこの大地から見る空もそれはそれで格別だ。

と一つ思い出した。

「そうだ。あの子の所にいこうと思ったんだった……！」

頭の中の混乱も口に出してみれば落ち着いてくるものだ。

そう、僕は彼女の手伝いに行こうと思っていたのだ。

――オオオォン！

「危ないかもな」

獣の遠吠えが辺りに響く。

今は夜中。獣の活動時間。

下手をすれば彼女が襲われてしまう。
急がなければ。

＊＊＊

村の宴会場に辿り着いた。
ごちゃごちゃと、必要のない食事をした後がある。
皿は散らばり汚れたまま。
だが獣に荒らされたというわけでもない。
規則的に汚されたその場所はまさしく祭りの後と言った様相だ。
食べ残しが処分されてるわけでもない。
何せその中心にいる翅の生えた少女に新しい傷は無いのだから。
一つ安堵の息を吐く。
そのまま少女に近づいて行く。
わざとらしく足音を鳴らすが気付かれない。
虚空を見つめているだけだ。

「またか……」

コレが、この行動の理由を知っている。
この村の住人が話していた事を聞いたから。
自分がちゃんとした人間なら解決出来たのにと歯痒い思いをしながら。
ぼうっとする彼女の顔の前で手を振る。
気付かれない。
名前を呼び――たいがわからない。
ホーかフーから始まる名前らしいが、迂闊に妙な名前をつければそれはそれでいつか本当の名前を思い出した時に備えてあだ名などを

つけることはなかった。
翅の生えた少女の顔の前で両手を広げる。
ほんの少し芽生えた悪戯心を込めながら。
手を叩いた。
「――あ……」
ようやく彼女がこちらを向いた。
「大丈夫？」
「あ、おはようございます？」
「今はこんばんはだけどね」
半覚醒状態の少女に冗談気味に答えるが。
「あ、私……何をしていたんでしたっけ？」
その反応に心が少し痛んでしまう。
「宴会の後片付けだよ。運動場の片付けは終わったから手伝いに来たんだ」
「あ……はいそうでした。すいま――いえ、ありがとうございます」
謝罪の言葉を区切り、礼を言う少女に笑顔を返す。
果たしてうまく表情を作れているかはわからないが。
謝罪よりもお礼が良い。と前に伝えたことは覚えてくれているのだ。
これで笑顔にならないはずがない。
きっと良い笑顔を作れているはずだ。

「ほら、とっととやっちゃおう……」
「はい……」

そう言いながら2人で手分けして片付けて行く。
意識が飛ばなければ彼女の動きは優秀だ。
本来ならば手伝う必要すら無い作業。
あっという間に片付いて行く。

「本当にありがとうございます。私なんかのために……」

――『いまの、わたしのためだったんですか？』

当初の彼女の反応を思い出す。
あの時からすれば改善された方だが。
それでも、なんかなどという自己否定気味の言葉を残念に思いつつもそこは何も言うことは出来ない。
そういう意味では自分もポジティブな方では無い。

「良いんだって。ほら、おかげで豪華なご飯を食べられる」

そこらに散らばる宴会の食べ残しを自身の家屋から持ち出した木皿に移す。
この村の住人達は本来ならば食事を必要としない。
娯楽としてそれを楽しむ彼らに食事に対する執着は無い。
側にいても彼らに幸福を与える事が出来ない人間の失敗作とされている自分では、彼らの手を煩わせて食事を用意してもらうことはできないし、かと言って村の外れとはいえ住まわせてもらっている身で、仕事を放棄して自分で食材を狩りに行く時間もない。
申し訳程度の食事は与えられているが、そういう意味では宴会の片

付けはボーナスタイムだ。

「だからむしろ感謝したいくらいなんだ」

「そうなんでしょうか？」

「うん。だからありがとう」

「あ――」

今の状況を悪いとは思わない。腹が立つ事もない。

ここは物言わぬ動植物達が意志を持ち、強い肉体と知能を持った世界。

人間たちが生存競争に敗北した世界。

自分の世界の人類が自然というものに行ってきた仕打ちを考えればむしろ自分の扱いは寛大な方だ。

特段自分は菜食主義と言うわけでも無かったし、道端のアリを踏み潰さないように生活するなんて意識すらした覚えが無い。

故にこの奴隷のような現状を嘆きはしない。

そういうものだと思うだけ。

だが――

「えへ、えへへ。嬉しいなあ。私。お役に立てたんですね……」

そんな殺されても文句を言えない自分を敬ってくれている心優しき彼女が、いや心優しいからこそ良い扱いを受けていないのは、如何ともし難かった。

記憶がなく、仕事も、言ってしまえば遊びもできない。

自身の生きる意味を持っていない。それでも生きる事ができるのが人間ではあるものの。妖精はそうはいかないらしい。

妖精の概念で言えば彼女はもう、殆ど死んでいる状態なのだ。

どうすれば良いのかわからない。
わかるのは、自分のような紛い物の人間ではなくちゃんとした人間が必要だということだけだ。
自分では何もできない歯痒さに、悩まされながら彼女を思う。
彼女にどうか幸福を。
願わずにはいられない。
何せこの世界に来て自分を助けてくれた２人目の妖精なのだから。

ここは妖精國ブリテン。
妖精達の住まう國。
僕はここに何をしに来たのだろうか。
霧の力で記憶を失っている筈の僕の何かに訴えてくるこの思いに、今はまだ気付かない。

役割

この世界での人間の扱いは散々だ。
それはあるいは愛玩用だったり、観賞用だったり、おもちゃであったり。あるいは嗜虐的な趣向を埋める為の奴隷であったり。
人間という立場では息も詰まるような状況。
嫌悪感を抱くような扱いかもしれない。
だがまあ、人間同士でも同じ事をする奴はいるし、人間は悪びれもせず自然というものを同じように、あるいはもっと残虐に淘汰してきたのだ。
そんな事でぐちぐち言う権利はありはしない。
自然を淘汰してきた人類である僕に文句を言う資格は無い。自然からの報復と考えれば納得もしよう。
だがそんな人間も、ただ壊されるだけの存在ではない。

彼らには役割がある。
妖精にとって人間は生きるために必要不可欠の存在。
らしい。
それはそばにいるだけで効果のあるもので。
いるだけでも妖精を喜ばせることのできるのが人間だ。それはチェンジリングという、恐らく僕の出身地である異世界からやってきた者達も変わらないらしい。
それを聞いて僕は少し喜んだ。
そりゃあ最初は酷い目にあったが、それを助けてくれるような女王の娘である素敵な妖精もいるし、その次に助けてくれた彼女のような妖精もいる。
暖かいとは言えないけれど、役立たずの僕を一応は迎えてくれる村

もある。
そんな妖精達の役に立てるのだ。
僕にも、誰かを喜ばせる事ができるのだと。
誰かの役に立つ事への新鮮さと、嬉しさが込み上げていた。
その胸の疼く感動に、記憶を失う前の自分はどれだけ役立たずのロクデナシだったのかと落ち込みながらも喜んでいた。
例え僕の過去がどうしようもない役立たずだったとしても、ようやくこの異世界で役に立てるのだと喜んだものだが。

結局、人間のはずの僕は彼らには満足感を与える事はできなかった。

「どういう事だろうな……」

どうやら根本的に何かの欠落があるらしい。彼らは失敗作と呼んでいた。
この世界では人間は家畜のように牧場で生まれるらしい。だから彼らはその内に出てきた失敗作なのではと言っていた。
だから見捨てられたのだとも。

だがそれは違う。
僕は牧場から生まれたわけでは無い。
この世界にいる前の記憶は失っているが、そこから先の記憶を失う事は一度も無い。霧の呪いだが何だかの影響はあり得ない。何故かはわからないが、確信を持って言えるのだ。
だからそう、なぜ使い物にならないのかは結局わからない。

どんな人生を送ってきたかもわからない自分。
殺生事に戸惑いが無く、なおかつ人の役に立ったと言う実感がない自分。
そんな存在が人間社会でいったいどんな人生を送ってきたのか、察するにはあまりある。
自分は人間として認めてもらえない。
誰かの役に立つ事もできない。
この世界の住人の仲間にもなれなくて、人間としても役に立つ事はできない。
そんなアイデンティティを失った僕でも、死ぬ事だけは出来なくて。
妖精達にとって自分が分からないというのは命に関わる問題なのに、自分には全く問題がなくて。
それもまた負い目を感じてしまう。
そんな卑屈な精神は記憶が無いからなのか。
あるいは元からそういう性格なのか。
自分でも分からない。
最初はそんなことに恐怖を抱いたものだが、ただ最近は違う。
そんな僕でも、役に立てる事がある。
彼らは楽しんでくれてる。
今日もまた、1日が始まる。
最初の頃とは違う。負い目だけの日々ではない。
ここにいて良いんだという実感が、僕の人生に彩りを与えるのだ。

「クソ、８０点だ!!」

「惜しい!!」

飛んでくるボールが頬を掠めた。
それを見て悔しがる妖精達。
今は、的当てゲームの真っ最中。

「グムッ！」

今度は鼻にボールが直撃した。
これは僕の体を使った的当てゲーム。
それが今やこの村の運動好きの活発な妖精達にとってフットサルに変わる一大ブームだ。
普通の人間ならば、いや、多少頑丈な妖精でさえも顔面が砕ける威力で投げられるボールは、僕にとっては悪いところに当たっても鼻血を出す程度の威力。
頑丈な僕だからこそできる、体を張ったエンターテイメント。

何もない僕が、妖精達を喜ばせる唯一の方法。

「１００点だ!!」
「なんだよクソ！　抜かされた！」

一喜一憂する彼ら。
次々飛んでくるボールを受け止めながら笑顔を向ける。
痛がってしまえば彼らをがっかりさせてしまう。
これが日常。僕の新たな生き方。
皆を楽しませるマトとしての役割。
そうして、ここ最近確立したルーティンをこなしていく。
それに充実感を感じていると。
いつもと違う妖精がやって来た。
２翅の妖精だ。赤髪と黒髪。
男性のような姿。その横には少し前に入ってきた金髪の少女のような妖精もいた。

身なり自体は妖精によって様々だが割と一貫性はある中、男性型の服装は少し変わっていた。
片方は僕の世界の服装と言う方がしっくりくるし、もう片方はあれは言うなれば中世の鎧だろう。
中世のヨーロッパ風の佇まいの妖精達だが、彼に関しては完全にコスプレのようだ。
あの着こなしは普段からあの格好で無ければできない佇まい。
見た目的には彼らは風の氏族。
どこかのお偉いさんに仕えていた兵士とかだろうか。
ガヤガヤと、新しい風に妖精達が騒がしい。
心なしか自分がここに初めて来たよりも、嬉しそうに見える。
そんな事に、ほんの少しばかり疑念を募らせていると、牙の氏族の1人、ドーガがボールを兵士ではない方の青年に渡していた。
（よし……！）
新人の最初の投球だ。
快く当ててもらうために、今後も遊んでもらうために笑顔を作らなければ。
こういう、仕事の為に笑顔を作る動作は慣れている。
作り笑いを出来るとは前の世界ではどんな事をしていたのだろうと、思いをはせながら使命感に燃え、ボールを持って戸惑う彼に笑顔を向ける。
目線が合う。
さあ投げてくれと訴えかける。
なんだったら最初は気持ちよく受けてもらうためにさりげなく位置をずらして高得点の場所に導いてやろうか。なんて思いながら構えてたら。
彼は、そのボールを投げる事無く、ドーガに何事かつぶやいた。
「なんだ、ライサンダーはフットサルの方が好きなのか!?」
――嫌な予感がした。

ドーガの言葉に、妖精達はガヤガヤと何事が話し合いをして、やがて。1翅の妖精が歩いて来た。

「これからフットサルをやるからマトはもういらないよ！」

出て来た言葉は最悪のものだった。

フットサルを楽しむ妖精達。

それを運動場の端から見学する自分。

天下は終わった。

惨めだった。

下手に必要とされる悦楽を知ってしまった為その落差は激しいものだ。

マトである僕には片付けという雑用しか残っていない。

隅っこで呆けることしかできない。

そして人間の失敗作である僕に話しかける妖精は彼女以外いない。

彼女は別の場所で仕事を振られているし、あまり大手を振って2人でいると他のヒト達が良い顔をしないのだ。

ライサンダー。と呼ばれる妖精が頭を使ってゴールを決めた。これと言って上手いというわけでもない。普通のヘディング。

それを、まるで奇跡でも起きたかのように讃える妖精達。

（何かおかしい……）

自分は人間。それも役立たずの人間で彼は妖精だ。

待遇の差などあって然るべきの筈だが、この差はなんだろうか。特に彼は何か特別な事をしていないのに、まるで、酔っているかのよう

に妖精達の気分が良くなっている。
まあ、それがなんだと言う話だが。

端で眺めることしかできない自分。
自身の役割がまた一つ失われた。その喪失感たるや中々なもの。
だが今の問題はこのフットサルがどこまで続くかだ。
彼らのフットサルの終了時間遺憾では運動場の片付けが遅くなる。
そうなると、宴会の片付けをしている彼女との合流が遅れてしまって朝ドーガ達が起きるまでに仕事が終わらなくなってしまう。
内心で焦りながら見ていると……
「あの……」
妖精に声をかけられた。
新しい入居者の1翅。
金の髪、翠の瞳。整った顔の可憐な少女のような見た目で。
恐らくは風の氏族なのだろう。
僕は殆ど放置されて名無しの彼女以外は話しかけてこない。だから急に声をかけられたものだから驚いてしまった。
「あ、ご、ごめんなさい！　いきなり話しかけて！」
そんな態度のせいで勘違いさせてしまったらしい。
「あ、い、いや僕こそ。ごめん。その、話しかけられるとは思ってなかったから驚いて……その、眼だけあってたのは気づいてたんだけど、あんまり僕から話しかけるのもどうかと思って……」
「あーまあ、そうですよね。すいません、私も本当はもっと早く話しかけたかったのですが、人間を独り占めするな！　と言われると思って様子を見ていたので」
「そ、そう……。良かった、取り合う程人気が無くて……」
「あ、あはは……」
彼女以外とのほぼ初めての会話に緊張してしまう。
上段めかして言ってみたが、笑ってくれた。すこし嬉しかった。
不器用な笑顔だったが、それでも胸が暖かくなる。
「私はアル……マシュと申します」

「僕は、名前はわからないけど、とりあえずマトって呼ばれてる。知ってると思うけど」
「マ……？　え、それって名前だったんですか？　それは……だってそれって……」
　別に名前と言うわけではないがそう呼ばれているのだからその方がわかりやすいだろう。
「まあ、本当の名前はわからないから、とりあえずそう呼んでくれていいよ」
「え、そうですか……そう。いえ、ではそのように。すみません、話しかけたのは興味があったからなんです。人間の方がここにいるのに驚いてしまって……それに、あんな……」
　彼女の気まずそうな表情に変わる。
「なんであんなことしてるのかなって……」
「あんな事って――」
　はて、何の話だろうかと思ったが、これまで目の前の少女の前で、やったことと言えば。
「ああ、マトになってることか……」
　正直なところ驚いた。そんな事を気にされるとは思っていなかった。
　別に的であることに理由は無い。
　この村で何の役にも立たない自分が唯一役に立つことができる仕事がこれというだけだ。
　言うなればこの村で生きていくための処世術。
　この世界で生きていくために必要な事だ。
　それを彼女に伝えてみる。

「痛そうですし、ケガもしてます。それでもですか……？」

痛み程度、全く問題無い。

生きる意味をなくして、不必要とされて殺されたりするよりマシだ。

どんなに醜かろうが、痛かろうが、死ぬよりずっとマシ。身体程度何にも問題ない。

それに、正直なところ必要とされると言う事自体が嬉しいのだ。自分が少し痛みと惨めさを我慢するだけで、皆が楽しんでると思うと心が暖かくなる。

さらに言えばこの的あてゲームに興じてくれれば運動場の片付けがうんと楽になるのだ。一石二鳥と言うヤツだ。

そう伝えたら。

彼女の表情がいかんともしがたいものになる。

きっと、この話は彼女にとっては良い話ではなかったのだろう。

申し訳なく思う。

「ごめん、変な事言っちゃって……」

「い、いえ。でもすいません。それならフットサルに誘導してしまったのは余計でしたね……」

自嘲気味に呟く彼女に、ああと思い浮かぶ。

なるほど、つまりはそういう事なのだろう。彼は、別にフットサルがやりたくて提案したというわけではないらしい。

そしてその選択には目の前の少女にも一部関わりがあるという事なのだろう。

マシュにそう言われて、どう答えたものか考えあぐねていた。その気遣いはありがたい。

だが正直なところ、フットサルが始まると思ったとたん、最悪の展開だと思ってしまったのは事実だ。

「……？　どうしました？」

答えを迷いすぎてしまったのだろう、痺れを切らしたのか、彼女に声をかけられてしまった。

「ア、その、ごめん、こういう時ってどう答えれば良いのか……その、正直に言うのもどうかと思って……」
「え？」
「い、いや、ごめん、今の、今のナシ」
戸惑って余計な事をしゃべってしまった。
気まずい。
なんだか鼻の頭がかゆくなってきた。
ポリポリとかく。恥ずかしさがほんの少し削り落とされた気がする。
「嘘をつこうとしたんですか……？」
う、そこを詰めてくるんだ……こうなったら正直に言うしかない。
「その、本当の事を言ったら君が傷ついちゃうんじゃないかって……」
「あ……」
「ごめん……」
「……」
謝るしかない。
嫌われたかもしれない。
横並び。顔を合わせて話していたが、彼女と目線を合わせることは出来い。
そのままフットサルへと視線を向けなおす。
しばらくフットサルの喧騒が響く。
ライサンダーが再びヘディングでアシストを決めたところで。
「……あなたは嘘は嫌いですか？」
「え……？」
そんな不思議なことを聞かれてしまう。
彼女の言葉、真意がわからない。
何故そんな事を尋ねるのか。
むしろ君がどう思っているのか聞きたいくらいだ。嘘を吐こうとした僕が嘘を語るなんて、そんなの言い訳じみた言い分にしかならない。
それでも話のコシを折るのもあれだし、ちゃんと答えるべきだろ

う。
　嘘……嘘は嫌いかどうか。そう言われてしまえば。
「難しいなやっぱり。どっちとも言えないよ。嘘そのものよりも、その先が大事だと思うから」
「その先……？」
　嘘をつくとき、理由は様々だ。
　相手を陥れるためにつく嘘もあるし、相手を敬うための嘘もある。
「嘘そのものに意味はない。大事なのは、どうして嘘をつくのかだと思う」
「どうして嘘をつくのか……」
「うん、本当は嫌いでも、嫌いじゃないって言ったり、本当は好きでも、好きじゃないって言ったり」
「……例えば、どういう時にそんなウソを？」
　言ってはみたものの、具体的にと聞かれると難しいものだ
「嫌いではあるけど喧嘩をしたくない時とか、好きだって言っても受け入れてもらえるかわからない時とか……かな？　ハハ、ごめん。聞かれると難しいかも……」
「……さっきつこうとした嘘は……わたしのため、ですよね？」
「……いや、まあ、改めて確認されるとなんか気恥ずかしいけど。でもどうだろう。君を傷つけないようにとは言ったけど、結局僕自身のためかもしれない。本当の事を言って君に嫌われるのが嫌だから――君に好かれたいから言うのを止めたわけだし……」
「す、好かれ――！」
　横合いから聞こえる慌ただしい雰囲気にフットサルに向けていた視線を横に向ける。
　頬をほんの少し赤くした彼女。
　怒ってしまったのだろうか。
「ごめん……」
「ンンッ――コホンッ、い、いえすいません、少し慌てただけですから。そんなに謝らないでください。嫌ったりしませんから……」
「え――」

驚いた。
基本的に僕は妖精には嫌われてしまう。
期待した人間だと思って近づいたら失敗作なのだ。
期待から裏切られると落胆は大きい。
悪いイメージがついてしまうのは当然だろう。
あるいは僕自身が彼らの苛立ちの琴線に触れるだけだからかもしれないけど。
でもそう、そうやって僕を慮ってくれる妖精は稀で。
それが酷く嬉しくて。
「ありがとう」
それを伝えたいと思った。
目を合わせてお礼を告げる。
少しでも、この嬉しさが伝わるように。
「――ッ」
風が吹いた。
驚いた彼女の表情。
ポトリと帽子が落ちる。
解放され、風に舞う彼女の金の髪は本当に綺麗で。
どれだけ見惚れていたのだろうか。

「またライサンダーが決めたぞ!!」

フットサル組の大きな声に目が覚めた。
慌ててみれば彼女は驚いたまま。
多分見惚れていたのは一瞬の事かもしれない。
慌ててしまう。彼女の頬は紅潮している。また怒らせてしまったかもしれない。
だから
「そ、その……僕にそうやって優しくしてくれるの、この世界に来て3人目だから……嬉しいよ」
慌ててフォローに入ってみる。

「――え？　さん、にん……？」
するとどんどんと彼女の熱が下がっていく気がした。
「３人目……いえ、アハハ。……そうですか。なるほどなるほど……」
「？」
風で落ちた帽子を被り直す。
落ち着いたが落ち込んでいる気がする。
どうしようと慌ててしまう。
どうにか会話をしようと、慌てていると一つある事を思い出した。
嘘といえばだ。
「そ、そうだ。嘘と言えば、嘘つきなヒーローの物語を知ってるんだ！」
その物語は、日本のコミックか何かで読んだ気もするし、実際にその瞬間を見たような覚えもある。
「嘘つきなヒーロー？」
「う、うん、その嘘つきは海賊なんだけど……」
とある、嘘つきな男の物語。嘘を本物に、あるいは嘘が本物になっていく男の物語。
そういえば妖精と言われている小人達も関わるエピソードがあったなと思いながら、彼女にとって面白い物語である事を祈りながら。話していく。
久々のまともな会話。
物語に一喜一憂して相槌をうってくれる彼女。
それをきっかけに、さまざまな会話が織り混ざっていく。
それがついつい楽しくて。
フットサルが終わるその時までお話は続いていった。

＊＊＊

予想よりフットサルが盛り上がってしまった。

グラウンドの整備から備品の片付け。
それ自体は難しくはないが、野犬やらなんやらが来るため時間がかかってしまう。
とっとと終わらして、彼女と合流して宴会の後を片付けなければ。
今回は宴会も盛り上がり、だいぶ長引いていた。
急がなければならない。
そうしなければ片付けが終わる前に他の妖精たちが起きてしまう。
これ以上、無能の烙印が押されてしまえばますます彼女の立場が危うくなってしまう

＊＊＊

結論から言えば間に合わなかった。

「片づけてねえじゃねえか！　またサボりやがって、この役立たず！」

怒号が響く。
予想以上に盛り上がってしまった宴の後は今から片付けをしても今夜の宴には間に合いそうもない。
手伝おうとした瞬間に来てしまった。
持っていた陶器をどうするべきか。
チラリとお供の牙の氏族に見られたが、手伝っているように見えてしまっているだろうか。
だがマト役をする前は基本的にいないものとして扱われるのだ。
気にされることもないのかもしれない。
そのせいで彼女が責められるのではと心配だったが、彼らにとってはそんなことよりも片付けが終わっていない事の方が気になっていたらしい。

ドーガはこれまでにないほどに宴を楽しみにしていたのだ。
その落胆たるや察するにはあまりある。
「なあ、なんで何もしてねぇんだよ。おまえ」
結局のところ、側からみれば仕事を振られて断らなかったのは彼女だ。
それが、生まれ持った性質のようなものだったとしても、仕事を引き受けたのならばそれは彼女の責任だ。
ドーガだけを責めることは出来ない。
だからと言って、彼女がああやって責められる事を許容する事も出来ない。
どうすれば良い。どうすれば……
「おまえライサンダーが嫌いなのか？」
――ひとつ思い浮かんだ。
――ガシャン!!
陶器を叩きつけた。
――グシャア！
丸太を切って出来た椅子を焚き火後に投げつけた。
「おい、お前!!　何やってんだ!?　訳わからねえことしやがって！」
突然の僕の奇行に驚くドーガの怒号に気にせず破壊を続ける。
「この、やめろ!!」

ドーガの振るった腕に突き飛ばされた。
牙の氏族の強力な腕力。
爪を立ててはいないとはいえ、容易く転ばされる。
「お前！　これじゃあ今日どころか明日も宴ができなくなるじゃねえか!!」
「うるさい!!」
「ああ!?　マトの分際で口答えかァ!?」
「うるさいうるさいうるさい!!　ずっとマトをしてやったのに、楽しんでくれてたのに!!　突然ポッと出てきた新人にばっかり！」
出来るだけ大声で。
「何がフットサルだ!!」
出来るだけ目立つように。
「なにがライサンダーだ!!」
哀れな男を演じなければならない。

苛立つドーガに掴みかかる。
「この、離せ！　失敗作！」
吹き飛ばされた。
「まさかお前、こいつの宴の片付けの邪魔をしてたのか？」
状況証拠というヤツだ。
元より彼女の意識が希薄なのは周知の事実。
それでもこれまでは片付けが出来ていた。
彼らが駆けつける頃にいたのは彼女以外では僕だけ。それが出来なかったということは、つまりは僕のせいになるということだ。
「そ、そうだよ……」
「テメェ――――！」

「ねえ、頼むよ！フットサルじゃなくて的当てをしてくれよ。もっと僕を使ってよ！」
ドーガに畳み掛ける。
言葉の内容は全てが嘘ではない。
的当てをして欲しいというのは紛れもなく自分の意思だ。
だからこそ感情が載っている。
もう一度掴みかかる。同じことの繰り返し。
だが、三度目となるとあちらも少し痺れを切らしたらしい。
今度は爪を立てた腕で振り払われた。
「あああああ!!　痛い、痛い、痛い!!」
手加減したところで、本来であれば切断されてしまう程の裂傷も、皮膚を裂くのみに留まるが、血を流す腕を抑えながらみっともなく叫ぶ。
「大袈裟なんだよ！　失敗作の人間の分際で!!」
「ひっ、ごめんなさい、ごめんなさい!!」
謝罪する。それに怯えを混ぜれば、これ以上ない程に情けない姿の男が完成するだろう。
「すいません！　すいません！　すいません！」
「――チッ」
そんな姿を見て、怒りを通り越して呆れや憐れみが勝ったのだろう。
それ以上何かをすることはせず、ドーガは、踵を返す。
彼は、牙の氏族では珍しく暴力は控えめなタイプ。
牙の氏族は痛ぶるよりもどちらかと言うと戦いを好む。
少なくとも理性のある内に弱者を暴力で痛ぶろうとする妖精はここにはいない。
似たようなことは何度もあった。もう、どうすれば、殺されない程

度に彼らの暴力を止められるかは熟知してる。
そしてもう、彼女を責める者はいなくなっていた。
「目障りだ！　消えろ！　村には近寄るなよ!!」
言って、ドーガ含めた妖精達は僕への悪口をコソコソと呟きながら散り散りになって消えていく。
静寂が訪れた。
腕を抑えながら立ち上がる。
ある種目論見通りに行ったことに安堵を覚えていたら、横を見れば名無しの少女。
不思議そうにこちらを見る彼女の眼。
その目には親しみの感情は一切なく。あるのは戸惑いだけ。
「……君も戻った方が良い」
「あ、あの……その、本当に私の邪魔を……？」
それは、間違いなく僕の記憶を失っているという事で。
「――ああ、そうだよ」
だが、そんな事よりも、彼女のその態度が本当に辛くて。
「……そうですか」
怒っても良いだろう。責めても良いだろう。
「その……ごめんなさい。私が貴方の気分を害してしまったんですよね？　私に至らない点があれば言ってください。貴方のお役に立てるようなことがあれば呼んでくださいね」
「……」
どこまでもこちらに気を使う彼女に、言いようのない悲しみを募らせてしまう。
「いや、良いんだ。君に対して怒ってた訳じゃないから、巻き込んでご

めん。今度は――」

今度は、なんだろうか。
どうすれば良いのか。
自分ではだめなのだ。
どういうわけか妖精の存在意義には人間が必要不可欠な場合もあるらしい。
きっと彼女はその類。
だが、人間として認知されない自分では、彼女を救う事ができない。
この村を出て人間を探そうにも、この村以外を知らない自分では共々のたれ死んでしまう可能性もある。
一つの解決策に名前というものもあるのかもしれないが、名前というものは他人が決めるものだが、妖精はそうではない。
思い浮かんだ名前もきっと彼女は喜ばない。

「――いや、なんでもない」
「？」

助けてあげようではだめなのだ。救ってあげようではだめなのだ。
何も知らずに、何も調べもせずに、他人を救うなどおこがましい事はしてはならない。
相手の人生を左右する重大な選択を無責任に選び、果てに死なせてしまうのであればそんなものは悪党と変わらない。
彼女が去るのを見ていると、遠巻きから視線を感じた。
それは昨日話をした金髪の妖精、マシュ。
こちらを心配そうに見つめるその目。
話したいことがあるのかもしれないが、下手に話せば彼女が妖精達からやっかまれてしまう。
そもそもあまりにも情けない姿を見せてしまったしツレである妖精達を半ば蔑むような形で暴れてしまったのだ。
気まずさの方が勝っていた。

少女の視線から逃げるように住居へと帰る。
自分の情けなさに泣きそうになった。

＊＊＊

何となく同じ波長を感じていた。

「いけません。ああなったのは私たちが余計な事をしたからです。原因である私たちが彼にどうやって声をかけますか？」

人との関わりに怯えてしまう。
なのに人との関わりに飢えてしまう。

「彼もそれを望まないでしょう」

何もしない自分が嫌で。居た堪れなくて。
どこかで居場所を求めていて。
だからあんな役目を引き受けて。

「ですので、彼が庇おうとしていたあの子の方へ行きましょう。元々お礼もあります。わたしたちにできることはたくさんありますから」

でも違っていた。
彼は自分を捨てた。
自分を捨てて、彼女のために動いた。
格好良く守るわけでもなくて、華麗でもなんでもなくて。ただただ痛ましくて。
あれでは守られる方も気を使ってしまう。

「さあ、では急ぎましょう」

でも、それでも。

「いいなぁ」

そんな彼に守られている彼女を羨ましいと思ってしまった。

＊＊＊

少女が来たのは、家についてから暫く経ってからのことだった。

朝のドーガとのやり取りから自分の住まいでぼうっとしていたら、突然名無しの少女がやって来た。

僕の住まいにやってきた彼女は、怪我の治療を買って出た。

最初は断ろうと思ったのだが、その時の悲しそうな表情を見れば誰だって受け入れてしまうだろう。

記憶のない彼女との自己紹介もそこそこに。腕に包帯とも言えない布を巻いてもらう。

それを受け入れているうちに、ひとつ気になることがあった。

「何か、良いことあった？」

ニコニコと、あまり見かけないような表情が気になってつい聞いてしまった。

「……え？」

聞かれたのが以外だったのだろうか。

しばらく呆けた後、すらすらと話し始めた。

先の金髪の少女、マシュをはじめとした3人組が獣避けの対策を施してくれたらしい。

それを嬉しそうに話す彼女の姿に、他人事ながら嬉しくなってしまう。
そして、うれしい理由はそれだけでは無いらしい。
なにがあったのか、改めて聞いてみれば。
あ、と何かに気づいたように口を押さえ。
「すいません。これは私たちだけの秘密でした」
花のように笑いながら、そう答えた。
それは、初めてみる笑顔で。
僕では与えられなかった笑顔で。
それがすごくうれしくて。
それでも少し寂しくて。
そんな、見たこともないような笑顔を浮かべさせることができた彼女にほんの少し嫉妬までしてしまった。
そんな自分を情けなく思っていながらも、ひとつ。思い浮かぶことがあった。
「ねえ、その、聞きたいんだけど……」

＊＊＊

ひとつの運命があった。
全てを失った妖精達の溜まり場に、妖精達が最も求める存在がやって来る。
それは言うなれば、飢餓寸前の村に食糧が運ばれて来るようなもの。
暴走するのも当然で、取り合いになるのも当然で。
この村にソレがやって来たともなればその後に起こる惨劇は確定

したようなものだ。
それはおもちゃの取り合いか、あるいは食糧の奪い合いか。
人間とて分解して楽しめるおもちゃならば当然そうするし、餓死寸前の状態で食糧を綺麗に処理しようとする者はいない。
「おい、おまえら、なにしてるんだ。順番はまだ先だ、屋根に戻ってろ」
だが、そんな中でも、稀にそういった存在を大切にする者もいる。
「ライサンダーにおかしな事はするなよ、アイツのシュートは凄いんだ」

だが――

「うるさいなぁ――」

餓死寸前の中、食糧に今まさに飛びつきたい中、大した理由もなく偉ぶってそれを止めようとする存在を誰が許容するのか。
牙の氏族、ドーガ。
餓死寸前。今まさに食糧を頂こうというその瞬間に静止に入る邪魔者に容赦する者はいない。
彼は背後の同じ氏族の妖精に惨殺される。それを起点に始まる惨劇が、言うなればこの村の運命。
「アイツは面白いヤツだ。アイツがいればきっとオレたちの生活も楽しくな――」
彼はその言葉を最後まで言い切ることは出来ない。
いつも共にいる同じ氏族の仲間に背後から襲われ殺される。

――その筈だった。

「くふぁっ!?」

それは、果たして偶然か。

ドーガを殺そうとした牙の氏族が鈍い音を立てながら吹き飛んで行った。

だがそれは、まさにドーガの最期を回避する一撃。

「お、おい!?」

自分を殺そうとしていたこともつゆ知らず、吹き飛ばされた妖精に駆け寄るドーガ。

今の事態に、興奮気味の妖精達も何が起きたと辺りを見回す。

見れば、地面にボールが転がっていた。

手のひらに収まるサイズのソレは、マト当てに使っていたもので。

「何でだよ……」

戸惑う妖精達の集団に、1人の珍客。

妖精達の家屋。屋根の上。

それは人間だ。

妖精達が求めてやまない存在。

「こんなに馬鹿になっちゃうくらいだったなんて……」

だが、その存在は人間でありながらも妖精に幸福感を与えることができず。

「出会ったばかりの人間にそんなに夢中になるなんて……」

失敗作と揶揄された。

「そんなに人間が好きなんだったら!!　なんで僕をもっとチヤホヤしなかったんだ!!!」

出来損ないの人間。

「マトぉ!!　お前、失敗作の分際で――フガっ!!」

マトであった青年の投げたボールが、叫ぶドーガの鼻に直撃する。
気絶までには至らないものの、鼻血が噴出するほどの威力ではあった。

「あんなに尽くしたのに――あんなに遊ばせたのに――!」
震えながら叫ぶその姿は、ある種妖精達以上の興奮状態に見える。
「それなら、そうなるなら――」
その迫力と声に、興奮状態の妖精達の全てが、彼へと視線を向けた。

コーンウォールの滅亡。
飢えた妖精の特性を利用し、そこに存在する。ただそれだけで滅びを与えた汎人類史の尖兵による悲劇。
そしてそれは妖精國の滅びの第一章。
これまで、何度繰り返しても覆らなかった始まりの運命。

それが、

「お前ら全員、マトにしてやる――」

ここに来て初めて変化の兆しを見せた。

＊＊＊

ライサンダーが人間と判明し、監禁されてから数刻。
突然に外で謎の騒ぎが起き始めた。
「外が騒がしい……おそらく妖精達の間で諍いが起きたのでしょう」
それに訝しんでいると、
「皆さん、こちらへ」

やって来たのは名無しの少女だった。

何故と、問いを投げたのは赤髪の騎士。トリストラム。

「遠くから騒ぎがあったので見ていたら、あの方が皆さんを村の外へ案内するようにと、皆さん、それがお望みなんですよね？」
「ええ、それは確かにそうですが。何故彼が？」

警戒を顕にしたのはトリストラム。
それは何か企みがあるのではと訝しんでのもの。彼とは信頼するには関わりがあまりにも薄い。

「その、あの人は、人間は自分一人で充分だと。もう1人人間がいたら自分は不必要な存在になってしまうからと……」

その答えに目を見合わせる3人。
彼の扱いを見ればそれをどう捉えるべきか。
こちらを逃すための気遣いの嘘の気もするし、本当のような気もする。

「……今は彼女に案内していただくべきでしょう。申し訳ございません。余計な事を聞きました。どの道ここに止まっていてはライサンダーの身が危ない」

「……」

「……マシュ？」

確認の意味を込めてマシュに視線を向けていたトラストリアだが、顔を俯け、それに気付かないマシュにライサンダーが声をかける。

「え？　あ、すみません。そうですね。私達だけでは外の妖精にはどうあっても太刀打ち出来ませんから。急ぎましょう」

言ってコッソリとテントを脱出する。

そこから遠巻きに見えたのは、見るに堪えない状況だった。

「なんと……あれは」

まさに惨状だった。

一人の人間を妖精が囲い込み、暴力を振るう。

一方的に痛ぶられているのは、件の青年。

完全に遊ばれている。殺されないのは妖精の遊び心故。

集団で相手を痛めつけるのは見ていて気持ちの良いものではない。

「やっぱり私――！」

足を止めたのはマシュだ。

だが、その声が響いてしまったのだろう。

集団の外にいた妖精が偶然にも振り返ってしまい、視線があってしまう。

「まず――」

「僕を見ろって言っただろう!!」

ライサンダーが慌てたところで。

それを遮るように怒号が響く。
それと同時に響く鈍い音。
それが聞こえた頃には、自然のあった妖精がゆっくりとうつ伏せに倒れ伏した。
その後、何かの物体が跳ね、マシュ達の元へとやって来た。
「ボール？」
「恐らく彼が投げたのでしょう。妖精を昏倒させるとは……」
見れば、彼自身やられるだけではなかった。
殴ろうとする妖精の腕を抑え込み、それを防いでいる。
「みなさんこっちです！　ついてきてください！」
急いでいるが故、その惨劇を見逃した少女の誘導に、散らしていた意識を覚醒させる。
そう、確かにあれを放っておくのは本意ではないが、あのまま一緒にいたところで全員殺されてしまうだけだ。
結末は決まっているようなものだ。
だがどうにか抵抗している彼を見たことで、このまま放っておいても大丈夫なのではないかという都合の良い考えがつい浮かんできてしまった。
その心の隙間を指すように、再び、少女の声が響く。
「いそいでください!!」
心苦しい事だがこのまま去る他ない。彼の行動の理由がどんなものであれ、このまま留まっていてはすべてが台無しになるのだから――

＊＊＊

「なんだそれ……」
妖精にとっての人間とはこれほどまでのものなのか。
これほどまでに妖精達を狂わせるのか。

このままでは大変な事になってしまう。
たかだか一人の人間の為に村人同士での殺し合いが起きてしまう。
そんな事は絶対に起こしてはならない。
まがりなりにも共同生活を送ってきた人たちが、あんなに楽しく宴をしていた妖精達が。
劇薬一つで全滅するなんて、そんなのあまりにも酷いじゃないか。
あまりにもつらいじゃないか。
あまりにも馬鹿らしいじゃないか。
そんなのは絶対に認められない。

「落ち着け、落ち着け、落ち着け……」

既に、彼女には話をしてある。
きっと彼女なら彼らを案内してくれるだろうし、彼らも彼女を悪いようにはしないだろう。
そのうちの一人は人間だし、金髪の少女。マシュがいれば彼女の性質的にもきっといい影響になる。
なにせ彼女にあんな笑顔を与える事が出来るのだ。
僕といるよりはずっと良いのだ。
もう、ひとまずの未練は無い。
準備は整った。
後は勇気を振り絞るだけだ。
身体の痛みは何にも思わなかった。
でも死ぬことだけは恐ろしい。
それをどうにかして奮い立たせる。
屋根の上にこっそり上って様子を見れば、今にもドーガに襲い掛かろうとする妖精を見つけてしまう。
迷っている暇はなかった。
ボールを投げる。常々思っていたが、身体の頑丈さや力はいったいどういう理屈なのか。
しばらくして一斉に振り向く妖精たちに、その思考も消え、あまり

の恐怖に一瞬だけ上ずった声が出た。
もう遅い。今更逃げれない。もうやるしかない。
そう心に決めながら。
赤髪の少女、妖精國の王女様にお礼を言えなかった事を後悔しながら屋根から飛び降りた。

誰かを救おうと言うのなら、その方法を間違えてはならない。

「うぐっ！」

腹を蹴られる。

「があっ」

頭を殴られる。

「ぎ……っ」

背中を切り裂かれる。

やられているのはこの村で唯一の人間だ。

マトと呼ばれ、遊戯のマトにされていた彼は、とある理由で反乱を起こした。

しかしマトにしてやるなどという強気な言葉は、どこへ行ったのか、多勢に無勢。そもそも、荒事自体経験のない青年では抵抗も素人並。一方的に痛ぶられてしまったのだ。

「失敗作の癖に、失敗作の癖に！」

飛び交う怒号は。暴徒と化した妖精達によるもの。

ライサンダーが人間と発覚してから、数刻。

彼を求めるあまり、暴徒とかしていた妖精達。

よりにもよって下等な人間以下の存在が自分達に歯向かい…暴力を振るったのだ。

到底許せるものではない。

本来であればとっくに壊れているはずのそいつは思った以上に頑

丈で。
あまりのしぶとさ故に半ばムキになった妖精達は元の目的すらも忘れてその下等生物を壊してしまおうと暴力を振るう。
意外なのは、青年の反撃によって意識を失っている妖精達がいることで。
その反抗もまた妖精達に熱を籠める。
例外は、元より大人しい性質の妖精達のみ。
初めはそのうちの1翅、風の氏族のハロバロミアが嗜めようとしたのだが、苛立った別の妖精に襲われてしまった。
それはまさに命を刈り取る暴力であったが、暴行されている青年の抵抗がその襲った妖精ごと意識を失わせたのはいかなる偶然か。
ライサンダーという真っ当な人間の取り合いによる殺し合いになるはずだったコーンウォールの惨劇。
その全ての暴力が青年に向いていた。
それはある意味青年の企み通りで。
件の者達は、とうにこの村を脱出していた。
暗がりだった村は一晩明け、すでに日が差し込んでいる。
時間がたったこともあるが、人間がこの場にいなくなったことによって、まるで御香のように漂っていた幸福感を与える力は霧散し、酔いが醒めてきた。
そして思いのままに暴れていた彼らも、いつかは疲労を迎えてしまう。
あまりの頑丈さに疲労を感じて来た一部の妖精は、落ち着いた様子を見せていた。
そして、冷静になった一部の妖精達が、ようやく気づき始めた。
「おい！　人間達が！　ライサンダーがいないぞ!!」
その叫びに、ガヤガヤと騒ぎ始める妖精達。
「いつの間に!?」

「見張りはどうしたんだ!?」

「お前だろ!?」

「違う、今の時間はあいつだったはずだ!!」

元より興奮気味だったところに訪れた青年の反抗。
火に油を注ぐその行為によって半ば理性を失った彼らに見張りなど務まるはずもない。
なすりつけあいが始まり、再び妖精同士の諍いに発展するのではないかと思われたところで。

「――プッ」

吹き出す声がやけに響く。

「ククッ　アハハハハッ!!」

笑っているのは、青年だ。
身体は傷だらけ、骨は折れ、顔面は腫れあがり、ほとんど原型はとどめていないというのに、大声で笑う姿はむしろ不気味で。

「お前、何を笑っているんだ!?」

その態度に1翅の妖精が問いを投げかけた。

「い、いや、ぷくくっ、本当馬鹿だよなぁって……」

それに笑みを崩さず答える青年。

「この状況で彼らがいない理由なんて、僕が原因に決まってるじゃな

いか……」

その言葉にざわざわと妖精達の熱が再び上がっていく。

「そんなんだから簡単に獲物を逃すんだ。全員でもっと強力しあえれば、逃がすこともなかったし。あの人間を皆で幸せに分け合えたかもしれないのに……」

「なんだと……!?」

馬鹿にされ憤慨される妖精達。

「たかだか人間一人の為に。馬鹿みたいに興奮して。食べることしか考えてない。それじゃあ獣畜生以下だ」

その言葉に、疲労で消えかけていた妖精達の興奮がまた活性化しかけていく。

「お前たちに人間があてがわれなかったのは女王が厳しいからじゃない」

逆る殺意に、青年は臆さない。

「もったいないからだよ。頭も悪くてこらえ性のない君達には、人間がいくらあっても無駄だ。命がもったいなさすぎる……」

「お前――」

「君達みたいな頭の悪い負け犬には、いいとこ失敗作の人間がお似合いだよ」

冷めかけていた熱が、再び燃え上がる。

再びの暴力。

それを青年は身体を丸めながら、身を守る。
「殺すなよ!!　どこに逃がしたか吐かせるんだ!!」
それでも、どこか冷静なのは酔いが冷めたからだろうか。
「言うわけな――グフッ!!」
よってたかって打ちのめされながらも、青年は笑みを絶やすことは無い。
それは、彼の強靭な精神力故か、あるいは恐怖が裏返っての物か。
それでもわかるのは、青年のまとう空気には絶望的な雰囲気が無いことだ。

（時間は稼げたかな……）

彼の心の内にあるのは、絶望ではなく願い。
青年が行動を起こしたのは、別に彼らの無事を願ったからではない。
もちろん、彼らがバラバラにされるのを止めたかったのもある。
村人同士の無意味な殺し合いを止めたかったと言うのもある。
だがその行為は副次的なもので。
全ての行動は彼女の為。
（どうか……）
どこまでも他人の為に尽くそうとする風の氏族の少女。
この村にいては本当にそのまま消費されてしまうか。あるいは妖精としての存在意義を全う出来ずに死んでしまう少女。
金髪の優しい妖精、マシュとならば……きっと今よりも良い生活を送れるはずだ。
全てを捨て、この村に流れ着いたであろう割には未だに全てを捨てていない少女。
どこかでまだ、希望を持ちたいと考えている少女。
マシュならばきっと彼女を無駄に消費する事もない。そして彼女もまた、どこか影のあるマシュの心の薬にもなってくれるはずだ。

（どうか、無事で――）

それは希望。

彼が、彼女によって与えられたもの。

それを思いながら、彼女に幸せでいてほしいと、そう考え、彼女達が無事に、この森を脱出出来ているようにと希望を込めた願いを頭の中で反芻したところで。

「やめて下さい!!」

声が、響いた。

それは、件の少女のもので。

「なんで……」

ここからとっくに逃げなければならないヒトで。

「ライサンダーさん達なら、もうこの森を抜けました!!」

誰よりも無事でいて欲しかった妖精で。

「だからもう、その人を痛めつけるのはやめてください……っ！」

自分よりも他人を優先する。誰よりも優しい少女だった。

＊＊＊

青年には落ち度があった。

「うわあああああああああ！　うるさい、うるさい！」

それは妖精という存在を根本から熟知していないが故に、彼女の状態を把握できていなかった事だ。

「さわるな、わたしにさわるなぁあああああああ！」

彼女はもう、手遅れだった。

「いたい、いたい、いたいの……！」

ほんの少しのきっかけで、とっくにモース化してしまう程にもう手遅れだったのだ。

「できない事ばかり押し付けられて、無理な事ばかり溜まっていって！」

「いままで助けてくれなかった癖に、一度も見てくれなかった癖に！」

忘却の森にいたが故に押さえつけられていた絶望が、一気に溢れ出す。

「今更！　良かった事なんていらなかった!!」

後はモース化を残すのみ。

「バカじゃないの、気づかないの？　騙されたのよ、あなた達!!」

「ダメ、ダメだよ……」

誰が見ても手遅れに見えるその状態。それを最も分かっている少女はしかし諦める仕草を見せなかった。
頭を抱え、膝をつく名無しの少女の肩を掴む。

「ふれ、ふれるな!!」

「ねえ、本当にそれで良いの!?」

「ふれるなあああああ！」

「ダメ、モースになんかなっちゃダメだよ!!　それじゃあ、あの人は何の為に残ったって言うの!?」

「ああ、ああああああ!!」

「貴方をいつも守ってくれた人がいたでしょう!?　ずっと、貴方を、庇い続けた人が！」

「――あ？」

動きは止まる。憎しみばかり浮かんだ表情は呆けたものになっていく。

「苦しいかもしれない、難しいかもしれない。それでも、お願いだから、ほんの少しだけでも、貴方を守ろうとした人を思い出してあげて――」

マシュの言葉に名無しの少女は、動きを止めるが、しかし効力は無い。少女は頭を抱え、苦しそうにマシュを跳ね除ける。
そして体から黒いモヤが滲み出て来た。

「！　ダメ……！」

「わからない、わからない！　だって、だって！」

頭を抱え、苦しみ始める少女。

「あああ、あああああ――!!」

あるいは、青年がこの世界における妖精に幸福を与えるしっかりとした人間であるならば、このように迷わせることはなかったのかもしれない。

ただそこにいるだけで幸福感を与える人間であるならば、ここまで拗れることはなかったかもしれない。

だが、汎人類史ですらない完全な異世界人であり、更に言えば特殊な生まれである彼は、根本的に人間としての作りが違う。表立って認識されようとも、根本的な意味ではこの世界には受け入れられていない。

いるだけで妖精に幸福を与えるような力も無い彼を自身の名前すら忘却した妖精がどうして思い出すことができようか。

それだけでは、自身の生きる意味を失った彼女のモース化を止めることは困難だ。

「あぁあああ!!」

『目的がなくたって別に良いじゃ無いか！　目的が果たせなくても、無駄な時間を過ごしてても良いじゃ無いか！』

だが――

『そんな事に文句を言う奴なんて放っておけば良い！　別にそいつに

迷惑がかかってるわけじゃないんだから!!』

何度も

『それに、君は何にもできてないわけじゃない!!』

何度も

『君は僕を助けてくれたんだ！　僕の命を救ってくれたんだ!!　君は僕にとっての救世主だ!!』

何度も何度も。

『君が僕にしてくれた事はこれから一万年たったって色褪せない価値のあるものなんだから……！』

何度も何度も何度も

『君はもう、これからただ生きていくだけでもお釣りが来るくらいの事を僕にしてくれたんだ！』

何度も何度も何度も

『だから――頼むから、自分に価値がないだなんて、このまま消えても良いなんて、そんな事言わないでくれ……！』

何度も何度も何度も。

繰り返される時の中、何度も何度も言われた言葉は、何度も何度も守られたという事実は……

「あ、私……」

少なからず影響をもたらす。
黒いモヤが消えたわけではない。
モース化収まったわけでは無い。
だが、意識を取り戻した彼女は蹲っていた身体を立ち上がらせた。
「行かなきゃ……」
「――え？」
彼女はそう呟いて
「行かないと」
その翅を広げ。
「ありがとう、アルトリア」
その場から去った。

カミナリ

「何で……！」

妖精に踏みつけられながら、青年は叫ぶ。
助けようと思った少女。
最も助かって欲しかった少女。
この騒動は元より本意ではない事態だったが、それを利用した事により、彼女にとってより良い未来に繋げられるのではとも思ったのだ。
共に逃げた者たちが、彼女を救ってくれると、そう信じていたのに。
それが何故ここにいるのか。

「お前！　何でライサンダーが森を出たのを知っているんだ!?」

分かりきった事を聞くのは、動転しているからなのか。
それに丁寧に答えるのは彼女の性質故か。

「ライサンダーさん達は、私が森の外まで案内しました。今頃丘を越えて、ソールズベリーに向かっているところでしょう」

戸惑いなく宣言する彼女に、最も驚愕したのは青年だった。

「なにを!!」

馬鹿な事を言っているんだと、言おうとしたところで。それ以上の怒号が響いた。
それは、ライサンダーが人間だと判明した時以上のもので。
青年を嬲る過程で疲労しきったはずの妖精達の熱気が、また再び再起する。

「なんてことを!!」
「せっかくの人間だったのに!!」

案の定だ。
そんな事を言えば怒りの矛先が彼女に向かうに決まってる。

「なんで……なんで……!!」

何故わざわざ戻ってきてそんな事をするのか。

「あの方たちは元々この村に訪れる予定のなかった人達です。　本来向かうべきところへ向かっただけ。妖精である貴方達なら理解できるでしょう?」

以前の彼女ならばこのような事態、おろおろと戸惑うばかりで、何もできないはずだ。
だと言うのに。

「そもそもあなた達では大切な人間を有効には扱えません。最初からバラバラにしてしまおうとしていたあなた達では、その場で楽しんで終わってしまうだけです」

なぜ彼女はこんなにも堂々としているのか。

「名無しのくせに知った風な口を!!」
「八つ裂きにしろ」
「殺せ!!」

おぞましい怒号の中でも凛とたたずむ彼女は、見たこともないような逞しさを放っているように見える。

だからだろうか。

「私を見てわかりませんか？」

確かに青年への暴行で興奮のピークは終えたという事はある。
人間がこの場にいなくなったことによって。酔いがさめたという事もある。
それでも、興奮のまま彼女を襲わないのは。
彼女の放つオーラに圧倒されているが故。

「名前の無い私が、記憶が曖昧で意識も朦朧としていた私が、こうしてあなた達の前に立っているのはなぜなのか、気になりませんか？」

ざわざわと、妖精達に動揺が走る。
確かに、これまでの彼女に比べれば、堂々としているのは明らかだし、妖精としての生気のようなものも感じ取れる。

「そのお方のおかげです。失敗作と言われていた彼もまた間違いなく人間。貴方達が見切りをつけるのが早すぎただけです」

だが、青年だけは気づいている。
確かに彼女は多少なりとも元気にはなった。
あれだけはっきりとした言葉を放つのは珍しい。
だが、震えている。
彼女の身体は間違いなく震えている。
あれは演技なのだ。彼女なりの必死の演技。
恐ろしいだろう、今にも逃げ出したいだろう。
というのに、自分をかばうような言動を放つ彼女に、開いた口が塞がらない

「そのお方のおかげで私は妖精としての矜持を取り戻しつつありま

す。このままその方を殺したら、今度こそこの村はおしまいです。この村に人間がやってくる奇跡はもう無いでしょう、厄災の時を待たずして、村中の妖精がモースになって終わります。楽しむこともなく、ただただ無為に終わるだけ」

青年からしたらそれはあまりにも暴論だ。
理屈が無いし、証拠も無い。
青年をかばうための屁理屈にしか感じない。

「本当か!?」
「でも確かにあいつは元気になってるぞ!?」

だが妖精は違う。
彼らはそんな暴論でも鵜呑みにする。
嘘か真か、ざわざわと妖精達が相談し合う中、彼女は青年へと歩み寄る。
戸惑いからか、これから起こる事への興味からか、彼女の進行を止めることはない。
いつの間にか、青年を踏みつけていた妖精もその場から離れていた。

「……ひどいケガ……」
「なんで……」

うつぶせに這いつくばる青年に、少女は膝をつき、頬に手を当てる。
君に助かってほしいから逃したのに、戻られたら意味がないのに。
何故戻ってきたのかと意味を込めた疑問。
「私が助かったとしても、貴方が犠牲になっては意味がありません。貴方が私を助けようとしたように、私も貴方を助けたいのです」
そう返された。
「……っ」

言い返すことが出来なかった。
彼女の特性を知っていたというのに、本当の意味で理解できていなかった。
誰かの為に尽くす事を目的とする彼女が、大人しく助けられるだけのはずがないと気づくべきだった。
涙があふれる。
駆けつけてくれたことに対する喜びではなく、自身の迂闊な行為によって失敗したことに対する後悔の涙。
それを知ってか知らずか。
「どうか泣かないで。確かに私はそういう風に生きてきた妖精です。誰かのために働く妖精。でも、きっとこれはそれだけじゃない」
腫れあがった顔から流れる青年の涙を指で拭う。
「私自身がそうしたかったから来たのです。それは、その願いは、私に与えられた目的とは別のもの……だって私はもう疲れましたから。誰かの為に働くなんてできるはずもない」
尽くすだけの自分の為に、命までかけてくれた青年。
「これは私の押し付けです。だからごめんなさい……あなたの気遣いを裏切ってしまって……」
「でも俺は生きてほしいんだ！　醜くても、みっともなくても、あがいてあがいてあきらめずに生きるべきだって……！　君はもう頑張ったんだから、誰を犠牲にしたって生きる権利はあるって……！」
それはかつて彼女に伝えた訴え。
受け入れられるはずもない。
生きていてほしいのだ。生きて生きて生きて生きあがいて、いつか報われるまで死なないでほしいのだ。
それ自分の願いなのだ。
その願いを。
「それは貴方への、私にとっての願いでもありますから」
本人に否定されては立つ瀬も無い。

「確かに、この人間は必要かもしれない!!」
「でも、大事な人間を逃がしたのは間違いないんだろう!?」
「人間は閉じ込めておこう!!」
「だけど、こいつは罰として殺すべきだ!!」

妖精達の不穏な言葉に呼応するように森に影がさす。
それに呼応するように雲行きが怪しくなっていく。
ゴロゴロと、どこかで雷の鳴く音がする。
それはこれからの悲劇を暗示するような不穏さで……

目の前に膝をついていた彼女が、誰かに引っ張られるように、離れていく。
妖精達に突き飛ばされる彼女の表情は笑顔のままで。
それは先ほどの青年のように、なすべきことをやり遂げたという表情だった。
――あなたならきっと、この村を出ようと思えば出られます。
彼女の意思が伝わってくる。
彼女は本当に自身を犠牲にしようとしているのだ。
「ダメだ……」
一部の妖精が彼女を動けないように押さえつける。
「だめだ……!」
処刑前の手遊びとばかりに、彼女に暴行を加える妖精達。
「ホープ!!!!!!!!」
思わず口から飛び出た言葉。
それは、ずっと考えていた彼女の名前だった。
ずっとずっと、彼女をどう呼べば良いかわからないから頭の中だけで呼んでいた。

この村で生きることへの希望を与えてくれた彼女を体現するようなその単語。
ホーから始まる、希望を意味するその言葉。
それは決して、数少ないヒントから得たものではなく。
とある時間軸の経験が流れ着いたもの。
全てがリセットされるループにも、残るものは存在している。
それを聞いた彼女の表情が、驚愕に染まり、そして笑顔に戻る。
先ほどと違うのは、目じりに涙が浮かんでいる事だった。
――ありがとう
それは、彼女の最後の言葉なのか。

「やめろ……」

うつ伏せで寝ていた青年は足をつかまれ、引きずられていく。

「やめろ……!」

処刑の前の下準備とばかりに、殴られ蹴られ始める少女。
青年は地面に指を指し、足を引く妖精に抵抗する。
その力に驚愕する妖精だが、頭を殴られ力が弱まってしまう。
「ガッ」
意識が飛ばなかったのは奇跡だった。
かろうじて意識の残る青年の視線の先。いたぶり終わったのか、妖精達は暴行を止め、膝を付かせ、押さえつけていた。
その姿は、処刑台に括り付けられる罪人のよう。
……彼女にはもう、意識は残っていない。
「やめろ!!」

青年にも、もはや抵抗する力は残っていない。

「やめてくれ……!」

彼女の息の根を止めようと出てきたのは、牙の妖精の鋭利な爪だった。

確実に首を落とそうと、牙の氏族は腕を大きく振りかぶり――

「やめろおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!」

―その瞬間に雷が落ちた。

＊＊＊

「ハ、私は……」

風の氏族の妖精。ハロバロミア。

ライサンダーが人間と知り、暴徒と化しかけた妖精達を嗜めようとして、殺されかけたところを偶然にも助かった妖精。

この村のある種の理性ともいえる存在。

それが目覚めた。

ライサンダーはどうなったのか、妖精達はどうなったのか、突然現れ暴れ始めたマトの人間は?

次々浮かぶ疑問も、すべて吹き飛ぶ事態が起きていた。

「げひゃっ!!」

「がばぁっ!!」

阿鼻叫喚。

断末魔を叫びながら妖精達が次々と吹き飛んでいく。

何が起こっているのかと視線を巡らせれば、そこにナニカが存在していた。

それは光そのものだった。
それはヒトの形をした光だ。

バチバチと奇妙な音を鳴らしながら、光は、奇妙な動きを見せながら妖精達を殴り飛ばし、あるいは蹴り飛ばしていく。
「――ヒッ!!」
ハロバロミアからすれば、それは突然現れた怪物にしか見えない。
その迫力に、ほとんどの妖精が尻もちをつき、怯えている。
中には抵抗しようという妖精もいるが。
「死ねぇぇぇぇ!!」
牙の氏族の1翅がその光に斬りかかるが――
斬りかかった妖精の真後ろに現れた光がその妖精を掌底で吹き飛ばす。
意味が分からなかった。
空間転移か、幻覚を見せられているのか。
戦いの最中。ついに別の牙の氏族が光にその鋭利な爪を突き刺したが……

「あばばばばばばばばばば!!」

おぞましい奇妙な叫び声をあげながら、小刻みに震え、煙を上げながら倒れた。
爪が突き刺さったというのに、何事もなかったかのようにたたずむ光。
あまりにも圧倒的な存在感。
人よりも世界の成り立ちに鋭敏な妖精をして理解不能であり。そして、世界そのものを滅ぼされてしまうような迫力。
「な、なんなのです……!?」
ハロバロミアのつぶやき。

それを代弁するかのように、一つの叫び声がこだました。
「お前、お前はなんなんだ……!!　お前は……!!」
叫び声をあげたのは牙の氏族のドーガ。
彼は、尻もちを搗き、後ずさりながら光に叫んだ。
「さっきまで、マトだったはずなのに!!　さっきまで、ただの人間だったはずなのに!!」
「あれが……マト?　あれが人間……?」
意味の分からない事実に、数々の疑問を浮かべるハロバロミア。
ドーガの叫びに、光は、動きを止める。
意識のすべてがドーガに向き。勇敢な牙の氏族であるはずのドーガはあまりの恐怖に気を失った。

次いで、光の意識が向いたのは、ハロバロミアだった。

「ひぃぃぃっぃぃぃ!!」
目が合うだけで存在そのものが消えてしまいそうな感覚に陥ってしまう。
あまりにもおぞましい。
それは、モースよりも不穏で、女王など比べ物にもならない程に恐ろしい。
その光は、ゆっくりとハロバロミアへと近づいていく。
その恐ろしさはもはや意識を失う事すら許さない。
「一体、いったいあなたは……!?」
光はハロバロミアをしばらく見つめ続けた後。

「ワレハ――」

より強く発光しながら。

「我はカミなり」

そう呟いた。

＊＊＊

雷が落ちてからしばらくたった後。
「ハァ……ハァ……全く……」
村の外、森の出口へ向かう道を、青年が歩いている。
彼は、妖精の少女を背負い、獣道を進む。
「ピンチの時に力が出るのは定番かもしれないけど、そんなお約束は本人からしたら大迷惑なんだよ……」
ゆっくりと、ゆっくりと
「最初から出させてくれよ……！」
歩を進めていく。
「今度はちゃんと考えるから。もっと、ちゃんと考えて、うまくいくように頑張るから……！」
独り言ちながら進むその足取りは非常に重いものだったが。
「ここからだ……ここから……！」
彼のまとう空気は、何よりも力強いものだった。

＊＊＊

森の外、美しい黄昏の空を見渡せる丘の上。そこに４人の人影があった。

名無しの少女が飛び去った後、戻ろうとするマシュを止めるようにライサンダー達の前に現れたのは汎人類史側の英霊だという、妖精王オベロン。

彼は、記憶を思い出させるために、とっとと丘を越えるべきだと提案したのだが、戻ろうとする金髪の少女、真名アルトリアの説得にてこずり、とうとう拘束して森の外まで連れ出したのだ。

記憶を取り戻したライサンダー。もとい藤丸立香たちに、オベロンは再び声をかける。

「君たちは聞き分けが良くて助かったよ。あのまま戻ったところで遺体が増えるだけ。苦しい選択だったろう。それでも決断してくれた君に感謝を」

「――わかりましたから。もう戻るなんて言い出しませんから、離してください」

「おてんば娘も納得してくれたようだね」

先ほどまでは大暴れと言った感じだったが、森を抜け、記憶を取り戻した影響か。とうとう観念したのか、彼女は非常に大人しくなっていた。

あそこに戻れば命が無いのは事実。

戻ったところで彼らを救うことなど不可能だ。

その上で互いの現状の確認を終え、出発と相成った。

「さて、では気を取り直したところで出発しよう！　……情報交換はその際に――」

妖精王オベロンが出発の号令をかける。

「……名前、結局お互いに名乗れなかったな……」

捨てようとしていた名前、渡そうとしていた名前。
それでも最後、彼女に呼ばれたのはきっと、そういう意味なのだろう。
だからこそ改めて互いの名前を伝えあいたかった。
そんなつぶやきは風に消え……
彼らとの交流は終わってしまったことだと切り替えるため、最後の最後に森を見つめたところで――

「え――？」

そこに、影が、現れた……

それは、どう見ても見覚えのある影で。

自然と、足が進んでいた。

駆ける。

影のもとへ駆ける。

後ろから自分を呼ぶ声が響くが、それどころでは無かった。

影は大きくなり、確実に誰か分かるほどの距離になる。

青年だ。あの時のマトの青年。
助けてくれた妖精の少女を背負っている。
駆ける自分と目が合った。
ボロボロだった。
顔は愉快な程にぼこぼこで、足は変な方向に曲がっている。こちらへのあいさつの為に掲げたその腕も関節がいくつもあるような曲がり方をしていた。

一歩一歩があまりにも遅く、万が一気が付かなかったら一生会うこともなかっただろう。
生きているのが不思議なほどの負傷具合。
その状態に、心苦しくなりながらも、無事でいてくれたことに感極まったころには、彼らの姿は目の前に。
「――やあ、マシュ……」
あのような別れだったのにも関わらず、こんな状態なのにも関わらず。
この気軽さはなんなのか。
だが、それよりも、そんな事よりも。
「アルトリア……」
「……え？」
「アルトリアなんです。私の本当の名前」
「そうなんだ……」
それを聞いた青年はその名を自然と受け入れ。
「うん、いい響きだと思うよ」
まぎれもなく心のままにそう言った。
「あなたは？」
知りたいことがあった。
「あなたの名前を教えてください」
本当の名前、自分たちを救ってくれた、背負う少女の為に命をかけた、勇気をもった青年。
マトではない、本当の名前を。
「僕は、『スタールート』」
「え？」
アルトリアはその名乗りに心底驚いてしまった。
だってそうだろう。
「昔は家電量販店「バイ・モア」の店員で」
話の内容が理解できないのもそうだが。
「とある事情で『インターセクト』っていう特殊な力を手に入れてしまった……今はシー、アイ、エーのエー、ジェントで……」

彼の言葉。
「え、あの……!?」
そのすべてが真っ赤な嘘なのだから。
「そ……れ、と……」
色々と問い詰めたいことがあったが、しかし。
ふらふらと今にも倒れそうなその体。問い詰める暇はない。
それでも。
「皆からは名前から抜き出してこう呼ばれてる――」
気絶する直前の最後の名乗りだけは嘘ではなかった。

＊＊＊

コーンウォール。
青年が去った後。意識を失っていた妖精達が続々と起き上がってきた。
「あいつはなんだったんだ……」
「あんな人間がいるなんて……」
起き上がり、やられる直前の記憶を思い起こした妖精達は口々に恐怖を告げる。
あまりにも圧倒的。
殺されなかったからこそ刻み込まれる恐怖という感情は、それこそ死んでしまった方がマシなのではないかと思うほどで。
口々に不安を口にする。
恐怖のあまり頭を抱えていまだに震えている者も要るほどだ。
そんな中、だれよりも震えているハロバロミアに、恐怖のあまり意識を失う前後の記憶を失ったドーガが声をかける。
「おい、アイツは？　あの化け物はどこへ行ったんだ？　ここからいなくなったのか？」

ドーガの言葉にハロバロミアは、蒼白な顔面を向け。
「あのお方はもう、ここを去りました」
「あのお方？　おい、そんなへりくだるようなマネ――」
「いけません!!」
それは常に上品であろうとしていた彼らしからぬ大声で。
「お、おい、どうしたってんだ……」
突然の大声に戸惑うドーガ。
ハロバロミアは構わず言葉を続けていく。
恐怖のあまり叫び続けるその姿はまるで……
「いけません、そのような無礼な態度はいけません……！」

『―はカミナリ』

「変わらなければ……私たちはより一層、上品に、美しく、規律を守って生きなければ……！」

「そうしなければ……そうしなければ……！」

「モースでもない、女王でもない、厄災でもない。本当の……！」

「彼の怒りを買えば、滅びよりも恐ろしい終末がやってきてしまいます!!!!!!」

天罰に怯える、人間のようだった。

本当のはじまり

はじまり

「今度はスパイドラマか、飽きないな」

リビングにあたる場所で、巨大なソファに座り、これまた巨大なモニターを見ながら1人の男性が一言。

窓からは見える風景はこれでもかと言うほどの美しい夜景が広がっている。

ここはとある超高層ビルの一室。

その生活スペースに当る場所。

「一応君スパイ組織所属だろう？　現実を知ってるのに楽しめるのか？」

会話の先にいるのは、簡易キッチンでグラスに酒を注ぐ青年だ。

「うん、まあ、スパイの現実を知ってるからこそってのもあるし。面白いよ」

整えられた髭を蓄えながら、男性は疑問を投げかけるがその答えは至極単純なものだった。

「それにこのドラマ、どっちかと言うとスパイというよりはヒーローものって感じだし……」

「そのヒーローの現実もわかってるだろう？」

黒髪の青年はソファの横にあるサイドテーブルに、コースターと共にグラスを置く。

髭の男性は手渡しが嫌いな為に直接は渡さない。

「とある平凡なオタクの青年がひょんな事から情報化した国家機密を頭にインストール。一躍スーパースパイヒーローに！　なんだスタールート君？　君はキャプテン・アメリカ派か？」

大袈裟な演技にほんの少しの皮肉を混ぜる男性に、フラッシュと呼ばれた青年はクスリと笑う。

「別にヒーローと言えばって話をしてるわけじゃないし、ヒーロー観

でどっちが正しいかなんて僕は興味ないよ」

「本当に？　ヒーローものの定番。みたいな言い方しただろう？」

「違うよ。あくまでカテゴリの話をしただけで……それに、最初から特別で、お金持ちだったり天才だったりするヒーロー作品はたくさんあるさ……」

「例えば？」

「バットマンとか……グリーンアローとか？」

「それは……光栄だ」

「本当に思ってる？」

　両手を上げて首を傾げる。

　いまいち本意が伝わりづらい。

「まあ、いいさ。で？突然のテレビっ子化には何の理由が？この間も日本のコミックを取り寄せてたろう。まあ僕は親日家だから望むところだが、我が愛しのペッパーが不思議そうにしていたぞ？　なんだ、この世界で漫画家に永久就職か？」

「まあ……いろいろ世界間航行とか、ガジェット関連の開発に詰まったから。こう言う時はリフレッシュが良いって聞いたんだよ。それにフィクションの中に何かヒントが詰まってるかもしれないし」

「ふむ、悪くない観点ではある。リフレッシュも大事と言う事に関してはね」

「……なにか含みがあるなぁ」

「なに、君のそれはリフレッシュと言うよりものめり込んでるって感じだからな」

「……そんなことあるわけないじゃ無いか。アハハ、ジョークが面白いなぁ」

「結構。まあ、娯楽のない青春を過ごしていたんだ。少しぐらいハメを外しすぎるのも良いもんだ。それにドラマもそうだが映画も良い

ぞ。映画の台詞を引用して上手いこと博識ぶれば、カッコつけられる。女性にもモテモテ」

流れているドラマを見流しながら、背後にいる青年へと振り返る。
青年はそれに肩をすくめるだけで返すと、少し離れたソファへと座り込んだ。

その視線の先にはもう1人――

「それで、ブルースはいつから？」

「ん？　ああ、主人公の親友が撃たれたところでグッスリ」

「……それ序盤も序盤じゃないか」

＊＊＊

まずは確認しよう。
僕の名前は『スタールート』
皆からは逆から読んでトールって呼ばれてる。
うん、多分。そのはず。誰が呼んでくれていたかは覚えていないけれど。
そんな感じで記憶は曖昧だけど、色々と覚えてる事もある。
まずは元々どこにいたか。
住んでいたのはアメリカ合衆国。
カリフォルニア州。
どんな仕事をしていたか。
家電量販店『バイ・モア』の元店員だ。
コーンウォールで平身低頭し続けられるあの根気は間違いなくこ

こで得たものだろう。
毎日毎日『神様』を相手にさまざまな気苦労を経験していたのだ。
妖精のご機嫌取り程度何の苦労もないのも頷ける。
それが表向きの僕の顔。
でも本当の職業は違う。
僕はスパイだ。
それも特別なスパイ。
『インターセクト』と呼ばれる、サブリミナル効果によって脳に直接情報を刻み込む特殊なシステムを見てしまった僕は頭の中に国家機密を蓄えてる状態になってしまったんだ。
そのせいでＣＩＡやＮＳＡに命を狙われたかとおもったら助けてもらったり。
日々悪の組織やテロリスト、犯罪者なんかと命のやり取りをして。
そんな感じでてんやわんやしてたらいつの間にかスパイになってたってわけだ。
インターセクトの効果は絶大で、格闘技術なんかも頭に直接入れられるから、いつだって体が勝手に動くように技を繰り出せる。
そのおかげで襲いかかってくる妖精相手にバッタバッタと大立ち回り。
一瞬意識を失うことがあったけど、そんな副作用あったっけ？　まあ無事だったんだし良いや。
ヘタをすると毎日ああやって誰かと戦っていた覚えがあるし。経験値的な意味でも力が強いだけの相手に負けることはない。
そんな、戦いが日常化するぐらいの僕の人生。
大変だけど、でも平気さ。
僕には心強い友達と、強くて素敵な彼女がいる。
友達の１人は幼馴染の――あれ？
彼女は銀髪に黒いドレスが似合う美女で、名前は――
あれ？
おかしい。ここまで詳しく覚えてるのに友達のビジョンが見えてこない。

彼女のビジョンも、うっすらとしか思い浮かばない。

困ったな。ここまで思い出せたのに。

まあ瑣末毎さ。どうせ故郷に帰るつもりはないんだから。

僕の目的はこの妖精國と僕の国が和平で繋がる為の下地作りってところ。

僕の本当の故郷、〇〇〇〇〇とブリテンを繋げるための――あれ？

本当の？　いやいや、僕は日系アメリカ人だし、ある意味日本が本当の故郷かもしれないけど、アメリカ合衆国が故郷だ。

そもそもここは異世界なんだから和平も何もないじゃ無いか。何を考えてるんだ。僕は。

まあ、とりあえず戦う力があるのはわかった事だし。

この國を守る為の兵士になるってのが将来のプランとしては妥当かな。

出来ればホープを養えるくらいの収入が得られると良いんだけど。

定住先を決める前に彼女にとって良い場所を見つける為のブリテン巡りはしておきたいところ。

今の情勢は不安定みたいだけど、だからこそ巡っておくべきだと思う。

不思議と元の世界に戻ろうだなんて微塵も思わないし。この國でずっと過ごしていくんだから、その為の妥協はしないようにしないと。

まあ、そんな感じで、　記憶は曖昧だけど、優秀でイケてるスーパースパイって言うのは事実な訳だから問題ないんだけど――

＊＊＊

「嘘だね」

「――ちょ、オベロン！」

コーンウォールから抜け、一先ずはソールズベリーと呼ばれる妖精の街に向かっている道中。

妖精達の大立ち回りを演じたのは良いけどそれもあって歩けないほどにボロボロな僕は、今はアルトリアに背負ってもらっている最中。

その横ではホープが歩きながら治療のための魔法をかけてくれている。

森から抜け、彼女達と合流した時。

誰が僕を背負うかと言う話になって、アルトリアが立候補してくれたらしい。

「私が背負います！」

「そんな、私が……！」

その後僕より早く起きたホープも僕を背負うと提案してくれたようで。

一悶着はあったものの、結局は交代交代で背負いながら、僕に治療の魔法を交互にかける事になった。

「ありがとう2人とも。今度、何かお礼は絶対用意するから」

「え――」

「そんな――」

アルトリアはわからないがホープは性質上誰かに施す事を目的とした妖精だ。

それが嫌になってコーンウォールに入った彼女。

施さなくて良い。と勢いで言ったものの、そうなると目的を見失う妖精になってしまう。

であれば彼女の行動を阻害することなく、かつそのストレスを貯めない方法を取るしかない。彼女のストレスは言わば施しを与え続けるだけで何も報われなかった事にある。
妖精が生きるには目的が大事ではあるが、目的を果たすだけでは生きられないのが厄介なところだ。
必要なのは報いだ。純粋なお礼の言葉と言うのはそれだけで心を満たすものだが、それじゃあまりにも足りなさすぎる。
だから――

「今は一文なしだけど、バリバリ働いてちゃんと形にして礼はするから。お金とか家とかが現実的だけど、何か必要なものがあったら言って欲しい」

形に残るもの。
はっきりと対価として計上できるものが望ましい。
報酬として実感できるものが良いだろう。
このまま忘却の森で一生を終えたいと思っていたであろうホープ。
あるいは、あのまま放っておけば勝手に妖精達も落ち着いて何事もなく終わったのかもしれない。
あるいは妖精が心変わりをしてホープを大切にしてくれるようになるのかもしれない。
あるいは、酷い話だが、あのまま放置して人間である彼がバラバラにされていた方が村やホープ達の為にはなったのかもしれない。
それを勝手に捻じ曲げた。
それを、予想外の事態とは言え利用して覆そうとしたのだ、
他でもない自分のエゴでだ。
だから少なくとも、もう彼女が自分の妖精生を後悔しない為の下地を作らないといけない。
責任は取らなければならないのだ。

とまあ僕の決意は置いておいて。
そんなこんなで道中身の上話になったんだけれど、目覚めた頃にはすでにライサンダー、もとい藤丸立香君たちの話は終わっていたらしい。
すり合わせの為にも、と僕の身の上話を語り始めたんだけれど。

「いくらなんでも嘘だなんて……」
「そういう君は今のを信じたのかい？」
「いや、それは……」

なんだなんだ失礼な。
確かに信じられないかもしれないけど、まぎれもなく本当の話だ。
なんとなく自分でも信じ切れていない気もするけど、悪の犯罪者や国をひっくり返そうとするテロリストなんかと戦ってきた覚えはあるから間違いない。

「嘘じゃないよ。失礼だな……」
「そうですよオベロン、頭ごなしに否定するのはトール君がかわいそうです」
（……君こそ気づいてるだろうに）

なんかいかにもな王様っぽい人、自称妖精王オベロンが僕のスーパースパイ人生に文句を言い始めたのだ。
「いいや、他でもない物語に一過言ある僕だからこそ言わせてもらうね！　君のそれは作り話にしても設定が雑すぎる！」

「――なっ！」

よりにもよって！人の人生を雑だなんて！

「百歩譲って君が家電量販店の店員だったとしよう！　では君はどん

な経緯でそのインターセクトとやらを見たんだい!?」
「え？　い、いや……え、アレ？　エッチなサイトを見てたらたまたま……だったっけかな……」
「エッチ……？」
「痛い痛い！　アルトリア！　足が痛い！」
　そんな足を締め付けないで！
「エッチなサイトとは……？　何か不快な響きですが……」

「うん、アルトリア！　そこに関しては聞き逃しておこうか！　とりあえず僕の追求を優先させてくれ！」

「いたた……ああそうだ。その、偶然は偶然さ、たまたまサイトを見ようとしたらなんかキーボードを押し間違って、そのデータがあるＵＲＬにアクセスしてしまったとかだよ！」
「普通そんな国家機密レベルのものをちょっと間違った程度で一般人がアクセスできるわけないだろう！　既に減点1だ！」

「……うっ　で、でも」
「そもそも！　本当のスパイが！　いくら異世界とは言え!!　自分の事をスパイとバラすはずがない!!!!!」
「な……っ!!!!!」
　確かに……!!!!!

「で、でも――」
　反論を続けるがその殆どにケチをつけられてしまう。

それも言い換えせない程に論破されてしまった。

「君はきっと嘘をついているわけではないんだろう。恐らくだが、君は過去に見たフィクションなんかの物語を自分の人生だと思ってしまっているのかもしれない」

「そんな事……」

ない。無いはずだ。

だってスパイとして戦った記憶は間違いなくあるのだから。

「今はそれで良いかもしれない。だけど僕が危惧しているのは、その記憶に引っ張られて自分の本当の記憶を思い出せない事さ。自分をスーパースパイとやらだと思ったまま無茶をしてしまうとここでは命が幾つあっても足りないしね」

まるでこちらを心底心配しているような挙動を見せるオベロンさん。純粋な善意による忠告と捉える事も出来たが。

言外に「記憶を鵜呑みにして余計な事をするなよ」という言葉を感じるのは僕の性格が悪いからだろうか。

「まあ、わかったよ……僕がスーパースパイと言うのは間違いないけど、なるべくちゃんと記憶が戻るまではスパイっぽい事はしないようにする」

「……まあ、それで良いさ」

＊＊＊

「まさかこの國の、ブリテンの女王様がモルガンって名前だなんて。異世界とはいえすごく嬉しいなあ」
「――え？」
僕の呟きにキョトンとするのはアルトリア。
今はホープに背負ってもらっている状態だ。
隣り合う異世界。藤丸君達の世界とこの世界の関係性を聞き、僕の世界も恐らく同じなのだろうと言う結論に至った後、とりあえず改めてこの國の王がモルガンという女王によって統治されていると聞いた時、思わず話の腰を折ってしまったのだ。

「その……何故感動するのですか？」
「何せ僕らの世界じゃすごい人気者だからね」
「なんと。彼女が……人気!?」
「え？　うん」

その言葉に1番反応したのはトラストリムだ。
そう言えばちゃんとした名前を聞けてなかったな。
見れば藤丸君も驚いた顔をしている。
あれ？意外と日本とかだと人気なかった？

「あー。ごめん、世界ってのは言い過ぎた。大袈裟すぎだったよ。せいぜい全人類の半分くらい？」
「それはそれでとんでもない規模だけど……」
「その、トールさんはどうして陛下と同じ名前の方が好きなのですか？」
ホープからの質問。
「まあ彼女自身と言うより彼女を主役としたとある本が理由なんだけど――」

この流れならば語るべきだろう。

「ウーサー王が実の娘であるモルガンを捨てた事から始まるんだけど――」

アーサー王物語。

その悪役として有名なモルガン。

悪辣な魔女として語られる彼女はその悪行ばかりが有名だが彼女の生涯のようなものが語られる書籍が出版されたのだ。

父親によって嫁がされた先は生きるのも困難な寒冷地。全く意味のないその婚姻は実の父から死ねと言われているのと同義であり、実質的には捨てられたようなものだった。

そんな始まりからして悲惨な彼女の生涯。

それは捨てられるだけにはとどまらない。

捨てられた後、代わりとしてブリテンの王としてあてがわれた後のアーサー王は父であるウーサー王が他人の妻を奪い、孕ませた不義理の子供。

諸説ではその夫を殺害して奪ったと言う説もあるだけにその出生の悪辣さは枚挙にいとまがない。

実の娘である自分が捨てられ、そんな不義理の子供が王位を継ぐのだ。

それに対して納得できる者がどこの世界にいると言うのか。

ウーサー王が何故その選択をしたのかは色んな設定があるが、その本では、いわゆる魔術師マーリンの企みと言う設定だ。

アーサー王の台頭に意義を唱えた各所の王たちによる戦争が始まったが、結局の所はそれが覆されることは無かった。

娘を捨てるというその悪行。それが罷り通ったのは、マーリンによる予言もあるが、女なぞに王位を継がせないのは当然だと言う周りの

価値観もあったからなのではと言う見解だ。
捨てられた挙句不義理の子供が王位をつぎ、それに抗議を唱えた捨てられた先の国の王も戦の果てに殺された。これで恨むなと言うのがおかしな話だ。
彼女は復讐か、あるいは実の父とマーリンによって滅茶苦茶にされた人生を取り戻すためか、手段を問わない方法でブリテンをその手に収めようと暗躍する。
その手腕は、まさしく魔女と呼ばれるにふさわしい悪行だった。
怒りを抱くのにこれ以上無いほどに尊厳を破壊された上、故郷でもある国そのものに魔女と揶揄され、ある種陰湿に苛め抜かれたモルガン。

「確かに彼女の行動は褒められたじゃないかもしれない。でも僕は彼女を魔女だなんてまかり間違っても呼べないよ。復讐心に飲まれた弱い心の持ち主だっただとか、もともと悪辣な魔女だったとか運命だっただのなんだのなんて言い出す奴がいたら……」
「……」
「俺はそいつらを絶対に許せない」
「……」

こういった作品が出てきたのもまた時代なのだろう。
僕の世界ではヒーローという物を純然たる正義とすることに疑問を抱く者が多く見られた。
その証拠に、世界を守っていたはずのスーパーヒーロー達であるはずのア○○ジ○○○も身勝手な自警活動と揶揄されることもあり、それに反論する術も特に無く、最終的には実質的な解散となった。
ん？これは映画か何かの話だったかな？
まあいいか。
いわゆる悪役視点で語られたその物語に共感なのか、同情なのか、感銘を受けた者が多数おり、世間ではアーサー王派とモルガン派に意見が二分したものだ。

二分と言うにはそこまで簡単ではなかったと思うが。
そんなこんなで長く語ってしまった。周りの空気はそこまでいいものではなくなっていた。
なんと言うか、藤丸君の表情は気まずそうだし、目を閉じていることが多いために感情がわかりにくいトリストラムの空気もわかりやすくひりついている。
彼らはもしかしたらアーサー王派なのかもしれない。
「まあ、細かい話は置いておいて、こうして物語の悪役をさせられた彼女が異世界とは言えこうしてブリテンの女王様になってるんだ。彼女の嘆きに感銘を受けた読者の一人としては思うところはあるよ。」
さて、いい雰囲気ではないし、とっととこの話を切ってしまおうと思ったところだったのだが。

「その、トール君自身はどうしてモルガンを好きに……？」
「んー……」

アルトリアの問いにすこし考える。
言われてみれば難しい。
自分でも不思議なのだ。
所詮は民間伝承の、それも、原典でもなんでもない、あくまでその伝承を設定として利用したただの物語。
それにここまで胸を熱くさせられた理由はなんだろうか。
覚えているのは言いようの無い怒りと悲しみを抱いた事。
それはきっと――

『私はブリテンそのものだと言うのに！　ブリテンの王になるはずだったのに！』
『どうして……！　わたしはすてられたの!!　どうすればよかったの……!?』
「彼女の嘆きを実際に聞いたような気がしたから……」

「実際に？　まるで会った事があるかのような言い方だね？」
オベロンの問い。確かにあんな言い方ではそうとらえられるのも納得だし、僕自身不思議に思っている。
だが、まあ、この流れなら
「いいや、きっとフィクションの物語を自分の人生だと勘違いしてしまってるだけだよ」
こう答えるべきだろう。

＊＊＊

ソールズベリーにはこれと言ってトラブルもなく辿り着いた。
新しい出来事と言えば、ダヴィンチちゃんと言う藤丸君たちの友達の女の子が迷った末に酒場で辿り着き、店員として過ごしていた事が発覚したこと。
ダヴィンチといえば思い浮かぶのはレオナルド　ダ・ヴィンチ。
〇〇〇がテレビリポーターに現代のダ・ヴィンチと称され、私は芸術家では無いと皮肉で返したのは記憶に新し……いや、誰が言ったかも覚えていないのに新しいも何も無いか。
とまあそんな同じ名前の女の子と出会って、積もる話もあると言う事で早めの解散となりそれぞれにあてがわれた部屋でゆっくり休んでいたのだが――

「やあ、スタールート」
「オベロン」
ノックの音に出てみれば現れたのは自称妖精王。
「どこかへ行ったんじゃなかったの？」
「いや、その予定だったけどね。ひとつ君に聞きたい事があって」
部屋の椅子をあてがうが、彼は良いと断り窓際に立つ。
「で、聞きたいことって？」
「なに、昼のモルガンの話さ。僕もアーサー王の物語には一過言あってね。同系列作品のファンとして聞きたいことがあったんだ。あの場じゃ聞きづらかったしね」
「まあたしかに」
結局あの後、モルガンの話は流れ、僕の世界の話なんかになったのだが、その後もどこか変化した空気が戻ることは無かった。特にトリストラムは難しい顔を崩すことなく、ソールズベリーに辿り着いたのだ。
「では本題だ。僕の読んだ書籍ではこういう設定があった。モルガンが悪として処理されるのと、アーサー王の統治が崩れさるのは、その後の世界そのものの存続の為に必要な事だったとね」
肌にゾワリと、不快な感触。
「……どういう事？」
「そのままの意味さ。その書籍のモデルとなっている、いわゆる僕たちの世界は言うなれば人類史と呼ばれている。人間たちの発展によって紡がれた歴史。ブリテン島は人類史が存続するにはあまりに

も神秘に寄り過ぎた島だった。僕の知る物語の設定では、神秘の類と人類は反りが合わないのさ。だからブリテンが滅んでおかなければ悪い意味で人類史に多大な影響を及ぼすと言う話でね。必要な犠牲だったと、滅ぶべくして滅んだと言われているのさ……」

それはまあ、なんと言う悲劇にはおあつらえ向きの話だろうか。

とはいえこれはあくまで創作物。

たった一人の人間の選択が世界の存続にかかわっていくなんて言う物語はざらにある。

そのうちの一つだと思えばそこまで言うところもない話だが。

――それなのに

燃え滾るこの思いは何なのだろうか。

「そこでアーサー王の物語に思うところのある君に尋ねたい」

「どんな……？」

――なんとなく、オベロンの雰囲気は物語の是非を語り合うような気軽な雰囲気ではない。

「君のご執心のモルガンの犠牲やブリテンの崩壊が人類の為に用意された運命だとしたら、その犠牲の上でなければ成り立たない世界があるとしたら、君は世界とブリテン。どちらを取るのかな？」

どこか、答え一つで今後の全てが左右されてしまうようなそんな雰囲気をまとっているオベロン。

だが所詮は物語の話だろうし、気を使った答えを出す必要もないだろう。

そんなの、僕の答えなんて決まっている。

「簡単だよ」

「……へえ、どちらなんだい？」

記憶の薄い僕だけど、それだけは記憶に左右されない僕自身の意見

だという自信がある。

「――そんなクソッタレな運命を、そんな運命を生み出したナニカを壊すだけだ」

それが俺の答え。

と言ってもケースバイケースではある。

どちらにより大事なモノがあるかという事も重要であるし。その時の状況にもよるだろう。

そう付け足そうとしたのだが――

先の答えを聞いて、しばらく呆けた後にオベロンが笑い始めた。

ただただ笑うだけだった。

何というか出鼻をくじかれた気分。

続きを言いづらくなってしまった。

にしても一応は真剣に答えたのに、笑い始めるなんて失礼な話だ。

そもそも――

本当は全く笑っていないのが引っかかって。正直気分は良くは無かった。

＊＊＊

笑いでない笑いを一通り披露した後、オベロンは去って行った。

ベッドに寝そべり、天井を見つめる。

モルガン。

僕にとっては物語の人物。
この、世界の女王。ただそれだけのはずだ。
それなのに、この憤りはなんだろうか。
この虚しさはなんだろうか。
この暖かさはなんなのだろうか。
モルガン。ヴィヴィアンとも呼ばれている彼女。
「モルガンに――ヴィヴィアン……」
どことなく声に出す。
やっぱり心にじわりと広がる暖かさ。
同時に襲い掛かる焦燥感。
不意に天井に伸ばすように右腕を伸ばして手を開く。
気づいてなかったが腕輪が付いている。
特別な装飾もないなんて事のない腕輪だ。
腕輪をつけたまま触れてみるが反応は無い。
あまりにも装飾のないシンプルな腕輪。
オシャレにしては貧相な気もしないでも無い。
「何か特殊なコードとかで動くスパイ道具とか？」
僕の、オベロン曰く妄想だとか言うスパイ人生が本当であればありえる話だ。
「そもそもどうやって外すんだ？コレ」
繋ぎ目がないそれは、取り外しすらどうやってやれば良いかわからなかった。

＊＊＊

――スタールート（星の通り道）。
本名はトール。
異世界から舞い降り、妖精歴にてトネリコと出会った彼は妖精國調

停のために尽力し、そして妖精達の裏切りに会い、その歴史から消え去った。
彼は偶然異世界へと再び飛ばされると言う事故から紆余曲折をへて今度は女王歴のブリテンへと舞い戻ってきたわけだが。
残念なことに世界移動の影響で記憶を失っていた。
彼は今や妖精國を救うという自ら課した呪いに突き動かされ、異世界で手に入れた時を操る力によって、時の牢獄に自らを囚えた青年。
幾度となく妖精國を救おうと尽力したものの、あるいは殺され、あるいは最初の時間操作の際に自らに課したルールによって強制リセットを繰り返してきた。
記憶が無いゆえにそのループの道筋にて経験を生かすことはできず。何千何万と繰り返してもなお、彼にとって満足のいく結末には至らない。
そう、何度も何度も彼は時間を繰り返しているのだ。理想の結末に至るため、何度も何度もあがき続けているのだ。
もし、彼の動向を傍で見ている者がいたとすればその心労は計り知れない。

だが、どうあがこうと記憶を引き継げないのであれば、同じ行動を繰り返すことも当然ながらありえてしまう。
むしろ彼自身の性質に変化が無い限りは突き付けられた選択肢を選び取り繰り返さないほうがおかしいとも言える。
これまでと全く違う結末を呼び込みたいのであれば、大きな変化が必須なのである。

ここで一つ、とある村の話をしよう。
マルチバースと言うにはあまりにも遠い異世界。
その村は、とある事情によって屍人が群がる死の村と化していた。
その災害の理由はウイルスの類のような科学的な理由ではなく、もっと神話的な理由によるもの。
その中にも生存者がいるわけだが。

彼らは時空のゆがみによってその村を基点にした時の牢獄に囚われてしまう。
数日間を繰り返し続けるループに入った生存者達。
米国のホラー映画のゾンビのようでまた違う、屍人蔓延るその村にて、どうにか屍人からのがれる生者達。
時の牢獄の中で、死か、あるいは別の結末を幾度も味わっていた。
そんな中だ、夥しいループの中、幾度も幾度も変わらない行動と結末を繰り返し続ける最中、奇妙な行動を取るものが出現した。
その者は屍人から怯え隠れ、逃げている最中、とある建物に一度入るのだが。

何故か彼は、手拭いを濡らして、冷凍庫に入れておくという奇行に走るのだ。

その凍った手拭いは彼自身、一切使うことは無い、何かを予知したわけでもない。本当に、何の理由もなく、手拭いを凍らせる。
そして、その手拭い。何の奇跡か、後日訪れる別の者によって屍人の注意を逸らすための時限式の道具として用いられるのだ。
何千何万と繰り返されるループの中にはそういう奇跡と称してもおかしくない事象が発生する。

だからそう、この時の牢獄に囚われた彼が、腕輪を外そうと行動し――

たまたま、特殊な起動プロセスを入力し――

本来であれば記憶を取り戻したうえで彼が認識しなければ存在できないモノを目覚めさせる程度の事など――

奇跡と呼ぶにも烏滸がましい、瑣末事である。

＊＊＊

『何という――』

「な、なに!?　なにコレ!?」

突然だ、突然腕輪を弄っていたら、光りだして、腕輪の形状が変わり始めた。

金属っぽい硬い素材だった筈なのにまるで粘土のように形態が変化していく。

とんでもないのはそれだけではない。

腕輪程度のサイズからしたらあり得ない程に大きくなっていく。

質量保存の法則とやらはどこ行った?という現象で、その金属はどんどんと形状を変えていく。

「え、映画で見たことあるヤツだ……」

未来から主人公を暗殺しにきた液体金属ロボットを想起させるその現象は、その映画通りに人間の形状を取り始めた。

それは、女性の肢体だった。

髪の長い女性だ。それしか言いようがない。

彼女は人間の女性の形状を取ったものの、映画の液体金属ロボットのように人間的な彩色が施されることは無かった。

瞳は無い、柔らかさもない、冷たい金属のソレ。

だがその美しいフォルムは金属の質感のままで尚煽情的で、そのシ

ルエットだけでも見る者はその魅力に惹かれてしまうだろう。
　そのシルエットはやがて金属のドレスを着こみ、命を吹き込まれたかのように脈動し。
　瞳の無いその眼を僕に向けた後。
　腕を広げて、僕を抱きしめた。
『この時をどれほど焦がれていたのか、どれほど歯がゆい思いをしてきたのか……』
「あ、あの……その、親愛のハグは僕もうれしいんだけど……」
（あ、当たってる……硬いのに柔らかい。なんだこれ……！）
　いけない考えを拭おうと、彼女の肩を掴んで一度離すが、また抱きしめられてしまう。
「ちょ!!」
　彼女の事を知りたいというのに、このままでは気絶してしまいそうだ。
　もう一度肩を掴み引きはがす。
　どこか名残惜しいと思ってしまっている自分に反省し、彼女を見つめる。
　ち、近い。引きはがして尚、一歩距離をつめられてしまう。
　金属でできているはずなのに、その感情を感じ取れるのは、なぜなのだろうか。
「き、君は？　僕の知り合い？」
『ああ――やはり記憶がまだ戻っていないのだな』
「……やっぱり知り合いなんだ……」
『――よかろう』

　感極まったような声を出す彼女。
　マイク越しのようなくぐもった音の中で尚、美しいと言える声。
　その声から出る言葉は尊大そのもので、威厳を感じる。
　そんな彼女の口から紡がれるのは、その名前。
『私はＶ２Ｎ。今はそれで良い。本当の名前は貴方が記憶を取り戻したその時に――』

それが、あの書籍の著者と同じ名前なのは偶然なのだろうか。
名乗ったあと、彼女は再び僕を抱きしめたかと思えば、そのまま形状を変え、液体のように覆いかぶさった。
「わ……！」
思わず驚いてしまった。体中にまとわりつくようにはい回る液体金属が、心地よくもくすぐったい。
やがて体をはい回った液体は再び腕輪の形に戻り、その位置に収まった。
『トール、いつでも私はこうしてあなたの傍に。だが他の者にはくれぐれも内密にするように』
「え？　あ、ああ、わかった……」

当然だろう、こういう類は秘密にするのがお約束だ。

『もう寝るが良い。お前のバイタルは不安定だ。まずはゆっくりと睡眠をとれ』
「うん、ありがとう、お休みＶ２Ｎ」
そのやり取りの後、声が聞こえることは無くなった。
スリープモードみたいなものになったのだろうか。
腕輪をきょろきょろと見回す。
なんという技術だ。
まさに最新スパイガジェットって感じ。
ほら、やっぱり僕はスーパースパイだったんだ。
言われた通りに、ベッドへ入る。
不思議とすぐに眠れそうな気がしてきた。
「……よろしくＶ２Ｎ」
そういえば挨拶をしていなかったなとまどろみの中腕輪に向けて声をかけたら。
『ああ、今度こそ救って見せよう、我が――』
そう返答してくれた気がした。

盲信者

あまりにも想定外だった。

「どこに行ったんだ!!?」

「私が探しましょう！」

「ダメだ！今馬車から降りれば追いつかれる！」

「元より命を賭して妖精騎士に挑む算段だったのです！　本来であれば失った筈の命……！」

「……！　だとしても、今からのはただの無駄死にだ!!　探すにしてももっと体制を整えてからでないと！」

経験をつませる程度のつもりだった。

「あの煙幕はいったい何者だったんだ!?」

妖精騎士の出現は予想通りとはいかなくともあり得るとは思っていた。無事とはいかなくとも、騎士の言った通り、彼が犠牲となって彼女たちを逃がしてくれるとさえも予想していた。

だと言うのに、最も必要な存在が消えてしまった。

あまりにも予想外。

影も形も見当たらない。

「わからない。反乱軍の人達かな……予言の子が現れるのを待っていたわけだし」

この世界を滅ぼす(救)ために来たこの駒達を、彼女の為に有効活用するだけの手筈だった。コイツらを失うのはまだ良い。まだ許容範囲内だ。むしろ好都合とも言える。何せ最終的には滅ぼす相手なのだから。

「……少なくとも私達に害を与えようとはしなかった。彼女が予言の子だと知らないまま別の部隊が助けに入ったのかもしれないし、予言の子だと知って保護したのかもしれない……どちらにせよ無事だと良いけど……」

だが、最大最強の駒を失うのはあまりにも痛い。

「……わかった。僕の方にも反乱軍のツテはないわけでは無いから調べておくよ。今は……全力で逃げるしかない……」

人間牧場への偵察。
本来であれば殿を受け持った1人の騎士が消えゆく運命。
しかし彼らが失ったのは1人の少女、汎人類史を救い、この妖精國を滅ぼすために最も必要なファクター、予言の子。

「アルトリア……」

青年、カルデアのマスターの声が空へと消えて行く。
その声は決して届くことはなく。虚しく妖精國の空へと消えて行く。
それを耳にしながら、物語を紡ぐ作家は、苛立ちを内に秘めながら、逃走のためにその手綱を強く握りしめた。

＊＊＊

――　数日前

『やめとけやめとけ、今女王の軍隊に入ってもイイコトないぜ！
だって今年はエインセルの予言した年、『予言の子』があらわれる救いの年だ！　女王様も痛い目を見れば少しは税を下げてくれるさ！』
『そんなに文句があるならこの国を出ていけばいいんじゃないか？
女王様ははっきりお前たちを救わないって言ってんだろ？　寧ろ親切だろう。女王がいなけりゃどうせ殺しあって全滅してたんだから、予言の子がいなきゃなんにもできない無能はとっととこの國から出て行ってモースにでもなってろよ』
『ああ!?』
『すとーっぷ!!　なんでもない、なんでもありませんよ～？』

『まったく、最近の妖精は鉄の武器なんぞ使いおって……女王も何をやっているんじゃ……だがまあ、それもあとしばらくの辛抱じゃな。
『予言の子』がぜんぶ何とかしてくれる』
『モースにも触れない。武器も持てない。文句しか言わない無能なんて『予言の子』だって救いたくないだろうさ』
『貴様！』
『おっと、あっちで何やらお困りの妖精が!!　行ってみようか～!!』

『今夜の祭りはなんだろうね！また『予言のこと悪い魔女』の演劇かな！　ボクはあれが大好きでねぇ！　女王と犬騎士がやられるとスカッとするヨ！』
『なんだそのセンスのないゴミみたいな演劇は、作った方も見るほうもクズみたいな奴らなんだろうな、お前みたいに』
『なんだお前!?』
『あ？　もう一度言わないといけないのか？』
『いい加減にしてくれ――!!』

ソールズベリー。

「ホープ、大丈夫？」

「う、うん……平気だよ」

ほんの少し、周囲におびえているように見える。

彼女は元々ここの住人だ。

だが何もかも捨ててコーンウォールに来たと言うことは、そう言う事なのだろう。

良い思い出なんてのもあるかどうか。

彼女の心情を思えばここに来たのは迂闊だったのかもしれない。

コーンウォールから脱出して丸1日歩き、ソールズベリーの宿屋に辿り着いてから一晩たった。

今は情報収集の最中。人間である僕はホープの奴隷――従者として同行させてもらっているという状態だ。

彼らは仲間を探す為、職や今後の生活の参考にする為に情報収集という名目で彼らと一緒に散策していたが、途中オベロンの提案で分かれる事になった。

『ゼハー、ゼハー……っ！　僕達の目的は仲間探しだ。君の求める情報は手に入らないだろうし、一旦二手に分かれよう――』

怒られた。

酷く疲れた表情のオベロンを見れば二手に分かれた本当の理由など明白だ。

迷惑をかけた自覚はあるが、あんな事を言う連中を許容する事もまた出来なかった。

自分でもわからない。記憶は未だ戻らない。

手首に付いている彼女も僕の記憶は自然に取り戻すのを待つべきだと言っていた。
この町の妖精達の言葉を聞いて、心の底から煮えたぎるこの怒りを僕は具体的に説明することは出来ない。

「魔女か……」
「……？トールさん？」

不思議そうな顔を向けるホープになんでもないと笑顔を向ける。

「にしてもこの町の雰囲気を少しでも体感しようと思ったんだけど。予言の子、予言の子、そればっかりだな」
「……うん、皆、女王様に不満をお持ちの方ばかりだから」
「ああホント、不自由もしてなければ相当贅沢な暮らしをしてる癖にな……」
「……トールさんは、この世界の女王様、モルガン様の事も好き？」

女王への非礼極まりない街の雰囲気や妖精達の不満への嫌悪に気づいたんだろう。
少し気を使わせてしまっているらしい。

「いや、会ったこともないし……でもそうだな……どこか贔屓目で見てるのは否めない。それに――」
「……」
「僕は女王の圧政を酷いものだとは思わない……」
「え……」

存在税と言う圧政。人間の生産を制限している現状。
一部を除けば妖精達からすれば女王は悪以外の何物でもないようだ。

だが、コーンウォールに入る前に妖精達に散々弄ばれ、村に入った後のあの待遇を受けたからこそわかるものもある。
正直なところ、女王の圧政はむしろ生温いとも言える。

「その、どうして？」

当然ながら質問が飛ぶだろう。
嫌われるかもしれないがこればかりは譲れない。
だからそう、正直に口に出そうとしたら――

「ホープ!?　ホープじゃないか!!」

横合いから、声をかけられた。

＊＊＊

トールとホープ以外の、コーンウォール脱出組のメンバー達はあらかたの情報収集を終え、宿に戻っていた。
汎人類史のモルガンを憎からず思っている点や、トールの言動からにじみ出る女王シンパの思考からモルガンを打倒するような会話を彼の目の前でするのはよろしくないと判断したオベロンとダ・ヴィンチによって、二手に分かれるよう計らったカルデア組。
モルガン討伐派の彼らは、情報収集もそこそこ宿に戻っていた。
途中やる事があると別れたオベロンも宿に戻り、会話に花を咲かせていた。

「だからさ、彼女がその『予言の子』なんだよ……」

色々と情報収集についての話をしていた中にアルトリアが予言の子だと言う話が飛び出し、認めてもらうためには氏族長に会う必要が有ると言う話題となったところで。

「オーロラへの謁見ならできるけど、どうする？」

オベロンから、そんな提案があった。

＊＊＊

オベロンの提案によりオーロラのいる大聖堂へと入った一同。そのまま謁見に入ると思われたが、建物の中には予想外の人物たちがいた。

「あ、アルトリア……っ」

「ホープ!?」

目尻に涙を浮かべたホープ。

「ト、トール君!?」

そしてもう一翅の妖精に挟まれて長椅子に座っている。顔面を冗談のように腫らしたトールだった。

「もまめま！　まんめももに!?」

「顔が腫れ上がり過ぎて何を言っているかわからないよ!?」
「動かないでください！　貴方を治す為の秘蹟ですよ!?」
「む、むみまめん……」

ダ・ヴィンチがトールに叫ぶ中、ホープの反対側、トールを挟むように座る妖精が怒声を上げる。それに申し訳なさそうにトールが謎の言語を発する。

「しかし、ホープと私の秘蹟でもこんなに時間がかかるとは、貴方の身体はどうなっているのですか？」
「ま、ままみまめん」

ホープとその妖精は両側からその手をトールの顔に翳し、彼の体を治療しているところだった。

「貴方は――？」

出会った事のない妖精。藤丸立香から問いが出るのも当然だが、その問いに答えたのは本人ではなかった。

「やあ、コーラル。オーロラとの謁見の話は通ってると思うから来たんだけど、彼はどうしたんだい？　キミが人間に施しを与えるなんて珍しい」

立香の問いに応えるようにその妖精の名を口にするオベロン。

「お知り合いですか？」
「ああ、まあね……」

どこか、含みを持たせるようなオベロンの答えに疑問を挟むものはおらず、コーラルは口を開いて。

「この人間は、この町の妖精と暴力沙汰を起こしたのです……」

そんな、信じられない事を言い出した。

＊＊＊

『なんだ、ホープじゃないか!!』

『あ……』

『傷ついた翅の輩ががいると思ったらそれがホープで、それもまさか人間の奴隷を連れているなんて!!　随分裕福になったじゃないか!!

いやあ、うれしいよホープ!!』

『……』

『なんて都合が良い!!　ちょうど良かった！　俺も人間の奴隷が欲しかったところだったんだ!!』

『なあ、その奴隷、俺に譲ってくれよ』

『え……？』

『いいだろ？　いつも俺たちが欲しいって言ったら好きなものをくれるじゃないか、俺達になんでもやってくれる希望の妖精だろう？』

『それは――』

『――それとも、今回はダメだ。なんて言わないよな？』

『その……私は……っ』

『イヤだ……』

『――ハァ？　お前、なん……』

『ト、トールさん……』

『聞こえなかったのか？　イ、ヤ、だ。つったんだよイヌッコロ』

『お前――！』

「喧嘩の理由も伺いました。ホープにも事情を確認すれば言葉尻は汚

かったものの彼は一度も手を出すことは無かったとの事。それが功を奏しましたね。反撃していれば場合によっては彼の罪が増えていましたから。それを加味して処罰の決定を進めていたのですが……」

『まあ、まあまあまあ！　人間が妖精のご主人様を身体を張って護ろうとするなんて――！』

「それを聞いたオーロラ様がこの人間に強い興味をお待ちになったのです」

「成る程、彼女の珍しいもの好きが現れたのか……にしても君が人間を治療するとは珍しい。そもそも君だったらオーロラが許しても人間ごときがここにいるなんて私が許せない――なんて言いそうだったけど……」

「ええ、ですが彼は、牙の氏族の暴力に耐えきりました。それは例え妖精であっても困難な事。彼はただの消耗品ではないと私も認めざるをえません。それに醜い姿のままオーロラ様と謁見する事は許されませんから」

コーラルの視界の端にホープが写る。2人の会話で皆が事情を察する中。トールの体が修復され、顔の腫れも引いて来た。

「おお、治った！ありがとうホープ、コーラルさん！　凄い！　魔法使いみたいだ！」

魔法、という言葉に幾許かの反応を示す一同だが、それを気にもせずにパンパンに腫れから治った自身の顔をぺちぺちと叩くトール。

「トールさん……っ！　私……」

ひたすら明るげに礼を言うトールに対して悲痛な表情のホープ。

「私……の、せいで……！　ごめ――むぎゅっ」

自分のせいでトールは傷ついてしまったと、責任を感じた彼女による謝罪の言葉は、しかしトールの手にのって塞がれた。

「謝るなよホープ……」

「ももむまむ……」

「あれは俺があいつの従者になるのが嫌だから言っただけだ……」

「もがもが」

「それに言っただろ？　俺はホープのお陰であそこで生きてられたんだから」

「……っ……っ！」

「この程度貸しの足しにもならないよ……」

手でホープの口を塞ぎながら話すトール。

「ゴホン、良い話だとは思うんだけど――」

そこにオベロンが咳を嗜み、

「彼女、苦しそうだ」

「……っ……っ」

トールに口を塞がれ、息苦しそうにしているホープを指差しながら指摘した。

＊＊＊

『謁見はまず彼からです。貴方がたも彼の友人という事でしたら私も認めましょう。その人間も彼と同じ異世界の人間なのでしょう？』

「オベロン、彼をどう思う？」

彼らの謁見を待っている中、問うのはダ・ヴィンチだ。

「さてね、記憶を少し取り戻したらしいけど、言ってる内容は相変わらずだし」

ホープとのコントを見届けた後、トールの口調やどことない態度の変化に疑問を感じたダ・ヴィンチが何事かあったのかとトールに問えば。

『ああ、頭を殴られたからかな。記憶が少し戻ったんだ。残念なんだけど、俺はスパイじゃなかったらしい。あれは好きなドラマの設定だったんだ……』

酷く寂しそうにそう言い出した。

スパイでない事がショックだったのだろう。

しかし――

『俺はどうやらスーパースパイじゃなくて、とある呪文を唱えると変

身するヒーローだったんだよ！』

スパイである事以上に嬉しそうな彼を見て、一同は正直な所困惑した。

『へえ、それで？　一体どんな呪文なんだい？』

訝しげに聞くオベロンの露骨な態度にも臆さず、彼は自信満々に答える。

『――フ、よくぞ聞いてくれたオベロン。その呪文とは『シャザー――』ってこんなところで変身したら大変なことになる！　あぶねぇ！』

続く判明する彼の設定は相変わらずめちゃくちゃで、信用に値しないもの。

彼は決して悪人ではない。

『この力があれば女王軍にも入れるぞ……！　厄災も祓って、恩知らずの反乱軍も倒して。いつか女王様にも会ってみたいな……！』

こちらの事情を知ってか知らずか、やたらと女王シンパである事を主張する彼の言動は、こちらの足並みを乱す。

彼の思想はカルデアの目的を邪魔するものだ。

汎人類史のモルガンに異常な程に心酔しているトール。

アーサー王に関しては憎からず思っているようだが、兎にも角にも円卓の騎士嫌いが凄まじい。

それを察しトリスタンの事は皆にアーチャーと呼ばせているが、トールから滲み出る円卓嫌いの態度の　は、トリスタンの精神を乱しているようにも感じる。

そして、そのモルガンへの心酔ぶりはこの異聞帯の彼女に対しても同様らしい。
女王への不満を漏らす妖精に突っかかっていく姿はあまりにも短絡的で、まともな感性を持っているとは言い難い。
はっきり言ってモルガンを倒すと言う目的をもったカルデア陣営には彼はあまりにも邪魔だった。

「正直なところ旅に同行させるのは反対だ。そもそも危険だし、案の定の大怪我だ。彼の奇妙な思い込みで暴走してこちらまで危険に陥れられる可能性もある」

「思い込み。彼がスーパーヒーローって話？　君はどう思う？」

「十中八九ウソだね……そう思っていたいという感じではあるけれど」

「まあ、そうだろうとは思うけど、やけに自信があるじゃないか」

「なに、君と同じくらいの信頼性さ、ただ僕は曖昧な意見は好かないからね。言う時はズバッと言う！　それが妖精王の生き方なのさ」

「……成る程」

「士気の問題も出てくるしね。汎人類史に関しての説明をしても良いけど、モルガンシンパが治らなかったらコトだ。あえて悪い言い方をするならば彼は切り捨てるべきだ」

「見捨てるって事かい？　それは――」

「勘違いしないでくれ。当然彼の生活の補償はするさ。オーロラが謁見を許す程に彼に興味を持ったのは彼にとっても僕らにとっても好

都合だ。僕が色々取りはからってここでの不自由のない暮らしを用意しよう。モルガンを倒した後、どうにか説得をして汎人類史に連れて行けば良いさ。女王軍に入るのは無理だろうしね」

「成る程……」

難しい表情を浮かべながらも納得するダ・ヴィンチはオベロンから離れ、緊張した様子を見せているアルトリア達の方へと向かっていく。

「まあ、それも今の謁見次第……気に入られるか、地雷を踏むか。まあどちらにせよ消えてもらうのは変わらない……」

囁かれた妖精王の呟きを、聞き取るものはいなかった。

運命が壊れる音

１番最初の印象と言われれば、眩しい。
と言うのが感想だ。

「まあ、まあまあまあまあ！　貴方ね、体を張ってあの体の強い牙の氏族からご主人様を守った人間の方は！」

皺一つない白い肌。
整った顔立ち。
癖一つない流麗な金の髪。
それを統合して紡ぎ出される表情や所作がまたその美しさに磨きをかける。
背中に生える美しい翅がまた見事な色合いだった。

頭を殴られたからだろうか。記憶を少し取り戻したのが先刻。

その際にとりあえず分かったのは、ＣＩＡのスパイと言うのは好きなドラマの記憶だったという事。
正直なところかなり落ち込んだ。あまりにもショックだ。
創作物。それも自分と容姿が似ているわけでもない、なんだったら国籍すら違う俳優を起用しているドラマの登場人物だと思っていたのだ。
こんな間抜けな話があるのか。
だがそんな恥じる思いも束の間の事。トールは本当の記憶を思い出した。
実はスーパーヒーローだったのだ。とある呪文を叫ぶと変身するヒーロー。
ヒーロー、正義の味方。
喋った事も無いような連中を助けるようなお人好しだなんて、微塵

も思わないんだが。そこはそれ、記憶がまだ戻り切っていないのだろう。
恐ろしいのはこの記憶も創作物の可能性があるという事だが、まさか二度もそんな事になるなんてさすがにありえない。まず無いはずだ。無いよな？
ヒーロー故の経験か、権力者に対する畏れは無い。
この緊張は、権力者に謙るためのものではない。
隣にいるホープは彼女の威光に緊張をしている様子。
だが彼は違う。

――ド、ドキドキする……！

女性慣れしていない故の美しい異性に対する緊張であった。
目の前の女性、いやさ妖精はまさに絵にも描けない美しさ。
その美貌にクラクラしてしまう。
あまりにも魅力的だ。
まさに美女と言っても差し支えないその容姿に正直なところ頬を紅葉させてしまう。
定かではない記憶。
情けない事に、トールは女性経験はそこまで無いらしかった。

「そ……その……！　俺は……！」
「あら、なんだがお顔が真っ赤だわ。緊張させてしまったかしら？」
「あ、あまりにも綺麗なので！」
「まあ！　お上手ね。フフ、そのお世辞はどこで学んだのかしら？」
「え!?　いえ、お世辞なんかでは……」

「……オーロラ様」

「まあ、ごめんなさい。貴方があまりにも可愛らしいからついイジワ

ルしたくなってしまったの……！」
「い、いえ！　好きですイジワル！　なんだったらもっとやっていただいても――！」

――ギロッ

「ヒッ――す、すんません！」
「まあ、ダメよコーラル、そんなに睨んでは。ごめんなさいね。コーラルは誇り高い子なのだけど少し融通が効かないのよね。私の事を思ってくれているのはわかるのだけど」
「オーロラ様っ！」
「いいじゃないコーラル。そうやってプンプンしてると、怖がられてしまうわ」
「プンプン……っ可愛い……っ」

――ギロっ

「ヒィッ！　す、すいません!!」

「もう！　コーラル？」

「……コホン。オーロラ様、この後にオベロン様方の謁見もあるのです。今は本題へ入られてはどうでしょう」
「あら！　そう、そうだったわね。ごめんなさいね。もう少しお話をしていたかったのだけれど――」

オーロラとトール。街一つを管理する権力者と急にポツンと現れた前科一犯の余所者とは思えない気軽な会話にコーラルが釘を指す。
怒られてしまった。
ただプンプンなんて擬音を想像してしまうと少し可愛らしく感じてしまうが。

見れば、オーロラはのほほんとした雰囲気から一点。
彼女の表情が氏族の代表のものになっていた
その表情、雰囲気。
彼女の評判は美しさに特化したものだがそれだけではないのだろう。

「では改めて。私は風の氏族の長、オーロラ。このソールズベリーの領主でもあります。私の呼びかけによくぞいらしてくださいました」

厳かな雰囲気への変化。
ここから先はおちゃらけてはいられない。
先ずはトールの主人である彼女の挨拶が先だろう。
「わ、私はホープと言います。お初にお目にかかります。オーロラ様」
「その従者。トールです。改めてよろしくお願いします。オーロラ様」
「ホープに、トールね……ホープ。知っているわ。話だけは聞いていたの。ごめんなさい。皆貴方に甘えすぎてしまったのね……私にもっと、ソールズベリーの妖精達を嗜められる力があれば良かったのだけれど」
希望の妖精。
ホープの性質。
皆の役に立つ事が生きる意味である彼女のサガ。
それが彼女の生きる意味なのだから、使ってやるのが彼女のためだと。それが妖精達の理論だ。
確かに、生まれた意味を示し続けなければモース化するらしい妖精の性質を考えればある意味ではそれは間違ってはいない。
彼女を使い潰した者達を悪意善意で語れるものではない。問題なのは程度だが、それを定義するのも困難だ。
どこまでが許容範囲か、それは使い潰す経験がなければ示せない。
邪魔だからと、大量にいるから良いだろうと動物や自然を殺し続け、結果絶滅しかけてから慌て始める愚かさは人間であれやりがちな事

だ。
治療中。トールは、コーラルから聞いていた。
オーロラ自身、ソールズベリーの妖精達の尊敬を集めて風の氏族長としてソールズベリーを管理しているものの、人間まで愛そうとしてしまうが故に万が一の時は街の妖精に反逆されてしまうかも、という事らしい。
力はあっても全てを抑えるほどでは無い。
それでも彼女の魅力や努力が、このソールズベリーに平和をもたらしている。との事だ。
そういう意味で、オーロラが責任を感じる必要はないのかもしれないが。
こうして謝罪を出来るのは為政者としての立場故か
。それとも彼女自身がそういう性質なのか……
どちらにせよ。それを聞いたトールの中で彼女の評価が上がるのは当然だろう。

「……っ　いえ、そんな……っ！　オーロラ様が気にされる事はありません！」
「ありがとうホープ。でも私自身が納得できないの」

そう言って。
オーロラは、ホープの目を改めて強く見る。

「オーロラ様!?」

驚くコーラルの静止も無視し、オーロラは口を開き、頭を下げた。

「ごめんなさい、ホープ。私が至らないせいで貴方に苦しい思いをさせてしまいました。領主として、改めて謝罪させていただきます」

それは領主という立場としてはあり得ない言葉。隣のホープも酷

く驚いていて、心なしが感動しているようにも見える。
無理もない。
お目にかかる事も難しい領主にこうして謝罪されているんだから。
「そんな、おやめになってください。オーロラ様が私なんか――「ホープ……」」
相変わらず控えめでいじらしい態度のホープに、トールは短く声をかけ、彼女の背中を横から軽く押す。
控えめなのは彼女の良いところではある。だが自分の格を落とすのも良いが、オーロラのせっかくの謝罪。それを無碍にするのもコトだろう。
「――いち氏族の私に、そのようなありがたい言葉をかけていただいて、ありがとうございます……っ」
それに気付いたのか、言葉を変えたホープの感謝の言葉に。
オーロラは笑顔を向ける。
「フフ、人間の方にそんな気安く触れられるなんて楽しそうで羨ましいわ」
背中を押したことを言われたのだろうか。
そんなオーロラの言葉に顔を赤らめるホープ、目の前で氏族長にそんな笑顔を向けられているのだ。無理も無い。
「そして、ホープの従者トール。領主としては諍いを起こした事は立場上褒める事は出来ないけれど、良く屈強な牙の氏族からご主人様を守り抜きました。風の氏族であるホープを守ってくれたこと、氏族長として感謝させていただきます」

柔らかな態度に為政者としての芯を感じるその礼にだらしない格好はできないと背筋を伸ばす。

「は、はい。俺もホ――ご主人様のおかげで今ここにいることができるので、従者として、御守りするのは当然です……！」

「そう、何があったかは聞いてみたいけれど――」

「――オーロラ様」

「フフ。それは今度にするわ。では改めてあなた達に提案があるのですけれど――」

茶目っ気のある彼女の態度に見惚れていると彼女の口から、ひとつとんでもない提案が飛び出した。

「二人とも、もしよろしければ、このソールズベリーで暮らしてみないかしら？」

＊＊＊

「彼らにこの街で暮らすことを断られたんだって？」

予言の子、アルトリアと予言にある異邦の魔術師、藤丸立香との謁見が終わったその日の夜。

予定外の要素である彼らの情報を掴む為に、今一度、オーロラのもとへと訪れた。

「ええ、ホープにはコーラルの下に就いてもらって、彼にはいずれ近衛

兵になってもらおうとしたのだけれど」
「とてつもない好待遇じゃないか。他のソールズベリーの住人が聞いたら卒倒してしまうんじゃないかい？」
「とっとも素敵な2人ですもの。皆だって受け入れてくれるわ――と思ったんだけれど、断られてしまったわ。残念ね」

まさかの提案だった、予想よりも気に入られたらしい。
とは言え断った以上彼女の怒りに触れた可能性もあるが、様子を見る限りそうではないようだ。

「へぇ、その割にはそこまで怒っていないようだけれど」
「あら、怒るだなんてそんな、私も急な話だったと自覚してますし、彼らも考える時間は必要でしょう？」
「という事は完全には断られたわけじゃないわけだ」
「ええ、色々とこの國を巡りたいそうよ。最後には女王軍か、どこかの街の衛視になってモースや厄災の対処に当たる仕事に就く予定だったのだとか。ホープも同じように色々と見て回るのですって。その時に改めて返事をしたいなんて言われてしまって、どこへ行こうと私たちを守る事には変わりない。そんなことを必死に言われたらとても怒る事なんてできないわ」
「ああなるほど……」
「それに彼から聞く異世界の話もとても面白かったし」

あの男。空気は読めないが耳障りの良い事を言う程度の知恵はあるらしい。
さて彼女の言葉に嘘は無いが。
それが果たしていつまで保つか。あるいはいつ変化していくか。
それにしても彼は自分達についてくる気は無いという事か。
意外と言えば意外だ。
彼は、カルデア組はともかくアルトリアの事は気に入っていたように見えたが。

「それにしても。こんな時に妖精國観光とは、中々呆れた事をするね彼も」
「あら、あなたが誰かの悪口なんて珍しいわね」
「すまない。君のように優しい妖精にはそう聞こえてしまったかい？　何、少し彼の行く末を心配してしまっただけだよ。お節介がすぎると心配故に悪態をついてしまうものさ」
「確かに無謀ね。いくらモースに耐性がある人間でも街間の移動中に襲われたらひとたまりもないでしょうし。妖精國は予言の子で皆ピリピリしてるもの。でもね、彼、大丈夫だって言ったのよ？　その事であなたに聞きたい事があったの」
「君のためだ。僕にこたえられる事であればいくらでも」

何故大丈夫と答えたのか。
その先を、オーロラは理解できなかったと言う事か。まあ大方想像はできる。
懸念している彼の異常性。
嘘か真かわからない、彼の謎の設定

「彼、自分を『スーパーヒーロー』だなんて言ってるんだけれど、どういう意味かしら？」

彼の発言は嘘だ。だが、言葉の端々でそれを肯定しようとする発言は本当だ。
記憶が混乱しすぎて自分の発言が本当かどうか自分でさえわかっていないのだろう。
彼と話すたびに思うが、彼女は良く平気だなと思わざるを得ない。
今日、スパイだったという設定は彼自身の勘違いと言う事で否定されたが、さてヒーローは果たしてどうなのか。まあ十中八九嘘だろうが。

「いいとも、説明しよう。ところで他の事について彼は何か言っていたかい？　色々と面白い事を言っていたと思うんだけど、僕も興味があってね。まとめて聞いておきたいんだ」

「――ええ、そうね……他にもいくつか不思議な話をしていたわ」

――おや？

彼女の雰囲気が少し変わった。
これには覚えがある。
彼女の性質、美しくなければならないというサガ。
それにナニカが起きた時の――

（上手いこと地雷を避けたと思っていたけれど）

「彼、言っていたの。彼の世界には色々な人達がいて、その中に海の底に住む人魚と言う種族のお姫様がいるらしいのだけれど――」

（ものの見事に踏んだようだね）

大方また妄想の類だろうが、なんとまあこちらにとって都合の良い事をしてくれたものだと、内心でほくそ笑む。
ほんの少し、予定外の登場人物に警戒したが結局は物語の外で消えゆく運命の端役でしか無かったと言う事だ。

「ああ、是非ともお話させてもらうよ。オーロラ」
「お願いねオベロン。さあ、お茶でもいかが？あなたのお話は面白いから楽しみだわ」

物語は始まったばかり。
それを台無しにしようとする愚か者を消せる事に不思議と湧く高

揚感。思ったよりもあの男に苛立っていた事を自覚しながら、改めて物語を紡いでいく。

＊＊＊

夜

宿の一室。木製のテーブルの上。
そこに、この妖精國には不釣り合いな機械端末が置かれている。
それだけならまだ問題は無いのだが――

『それが、まったく酷いものさ……！』

動いているとなれば話は別だ。
聞こえてくるのはとある録音された会話。
それは妖精國では絶対にありえない現象。

『モルガンの支配も盤石じゃない。いまブリテンには新しい希望が生まれている』

女王モルガンの力によって、機械関係は軒並み使えないはずにも関わらずその端末は間違いなく機能している。
つらつらと会話は進み、いったんの終わりを迎えたが、また別の声が聞こえてくる。

『立香はモルガンを倒すためにやってきた』
『その後のことは考えていない。モルガンの代わりに支配する気はないんだ』
『何を隠そうこのアルトリアこそティンタジェルから旅立った希望の星！　モルガンに裁きを下す『選定の杖』と共に生まれた、本物の『予

言の子』なのさ!!』

騒がしい会話だったがそれもまた終了し、また再び会話が切り替わる。

『それに今回の相手は女王モルガンだ。アーサー王が出なくてどうするって話だし』

『『予言の子』である彼女と協力関係にあるコトはプラスになる』

『我々の目的、カルデアの内情については秘匿すること。カルデアが今までいくつもの異聞帯を切除してきた事実を明かしてはいけない』

『ブリテンを救って、白紙化地球に広がろうとする崩落とやらも防いで、そしてこのブリテンと戦うことなく笑顔で彼女と別れる結末になるとね!』

――ブツンッ

音が止まる。

自身の腕を枕にしながら、仰向けでその音を聞いていたその部屋の主は、しばらく天井を見つめた後、おもむろに立ち上がり、部屋を出た。

行き先は隣の部屋。

彼は優しくその部屋をノックする。

「あ、トール君。どうしたの?」

部屋から出てきたのは金髪の少女。

アルトリア・キャスター。

帽子を脱ぎ、リラックスした状態の彼女は訪れた客にさしたる驚きも無く、単純な疑問を口に出す。

「ああ、少し話がね。入っていい？」
「え？　う、うん」

宿の廊下で話すのもほかに迷惑がかかるだろうと。
青年、トールは中に入るよう頼み込んだ。

「トール君、どうしたの？　なんだが様子が――」
「アルトリア」

――違う。
そう言いかけたところで名前を呼ばれ、アルトリアに緊張の糸が張り詰める。記憶障害の為か、一人称や性格もあやふやな彼ではあるが、基本楽観的でこんなに緊張感のある態度になる事はまず無かった。
部屋に入り、奥まで行って振り向けば、彼はそのまま玄関で立ち尽くしていた。

「君に伝えなきゃならない事があるんだ――」

月光の届かないその場所からでは表情は窺えない。
だが纏う空気は真剣そのもの。

「――どうしたの？」

気軽な話ではないと、心構える。
頭に浮かぶのは予言の子について。
あるいは風の氏族長との謁見関連か。
ホープからはソールズベリーに住まないかと誘われた事は聞いていた。
さまざまな可能性を頭の中で巡らせる。

「決めたんだ。俺」

新たな一人称。最初に会った時よりも幾許か力強くなった彼の態度。しかしその眼の強さは初めから持っていたもので。その眼の彼の頑固さは既に救われると言う形をもって体感している。

一体どんな話だろうと心構えてたが故に。

「『予言の子』アルトリア」

正体を看破されている事には大した驚きは見せなかった。その後の流れは大半が予想できるもので。

だから――

「俺は、君を攫う事にした」

全く予想していなかったその言葉を、しばらく理解する事が出来なかった。

壊れ始めた運命

藤丸立香及びカルデアの面々は、マシュと思われる存在の調査の為、人間牧場に向かっていた。

「アルトリア？　大丈夫？」

ソールズベリーの兵士に案内され、数時間歩き続ける一同。

出発直後。人間と一緒にいることが初めてだと言う理由で調子の悪さを見せていたが、それに慣れることが無いのか、牧場が近づくに連れて更なる緊張を見せていた。

「い、いえ！　大丈夫です！」

それに気を遣って声をかけた藤丸立香だが、返ってくるのはそんな返事ばかり。

とは言え、これから敵陣への潜入だ。余計な事をしている暇も無い。

本人が言うのならばと、下がるしかなかった。

前を向く藤丸立香の背中を前に。アルトリアは下を向く。

今は彼の姿をまっすぐに見つめる事ができなかった。

アルトリアの緊張は人間に対してのものではない。もっと別の要因であった。

＊＊＊

オベロン達によって女王シンパである彼に内密で語られていた今

後の旅路。トールとホープをソールズベリーに置いていくと言う結論。
正直に言えば、別れるのは嫌だった。
カルデアの者達は確かに善人ではあるが腹に一物抱えていることは明白である。
一緒にいて気が休まっているかと言えばそうではない。
そんな中アルトリアにとって一緒にいる者達の中で最も安心できるのがホープだ。
それは彼女の希望の妖精という性質に起因するものではあるが、それ以上の何かを感じていた。
そんなホープと離れる寂しさももちろんだが、いくらオベロンによって安全が保証されていても別れる事で今後の彼女の動向がわからなくなるのが嫌だった。
そして、トール。
初対面からは考えられない程に快活になった彼。女王シンパである彼の予言に対する嫌悪感は正直な所気まずさがある。
だが、彼の、妖精達が予言の子に頼ろうとするコトへの嫌悪には少しだけ楽な気持ちにもなっていたのも確かだった。
彼の正体に関わる言葉は記憶の障害故か嘘か真かわかりにくい。本人自身が自分でも気づかないうちに自分の言葉を疑っているのだ。
だがそれ以外の、彼のある種考えなしのような行動から繰り出される言葉や行動は良くも悪くも正直さに溢れていて。それはある意味でひとつ安心できる要因ではある。
相手の言葉の真偽を見破ると言う妖精眼を持つ彼女はどうあがいても相手の嘘を見破ってしまう。
故に、彼女はいかなる理由であっても嘘が好きではない。
だが、今回ばかりは――
『――俺は、君を誘拐する事にした』
嘘であってほしいと思わざるを得なかった。

＊＊＊

まさかこんな事まで正直に言われるとは思わなかった。

（どうしよう――）

『人間牧場へ行くんだろ？　大方そのまま俺とホープが寝てる間にでも置いていくんだろうけど――まあ別にそこはどうでも良い。元からついていく気もなかったから……』

ぐるぐると思考が巡る。

目的地へ向かう道中も彼とのやり取りが頭の中を巡り続ける。

『別に今じゃない。今攫ったらあいつらの仲間の救出どころじゃなくなるからな。そこは尊重するさ』

そんな心配も余所に、滞りなく人間牧場へとたどり着く。

『攫うタイミングはそうだな……』

彼の誘拐宣言に嘘は無かった。

彼の心変わりがなければ――

『人間牧場を脱出するタイミングで俺は動く。アイツらが脱出する時にキミを攫う。アイツらが捕まるようなら脱出に関しては協力するさ。その程度には思い入れはある』

――彼はきっと自分達の傍にいる。

『乗るか、抵抗するか、心の準備ぐらいはしておいた方が良い。どっちにしろやるコトは変わらない』

結局、決める事は出来なかった。

（どうしよう……）

キョロキョロと周りを見回すが自分達以外の存在は感じない。
アルトリアには使命がある。
選ばれし予言の子として、女王モルガンを倒すという使命。
それは、妖精國を救う事と同義だと言う。
与えられた情報はそれだけ。
モルガンを倒せば妖精達は救われるということに関してだけで言えばアルトリアは決して疑いはしない。
圧制に苦しむ妖精達。「お前たちを救わない」と言う彼女の宣言。
どうあがいてもモルガンは悪の魔女。
倒されてしかるべきの悪。
悪い魔女を殺せば、魔女の支配する妖精國は自由と解放の名の下救われる。
わかりやすい物語。

『俺は予言の子に頼って、しかも女王を殺そうだなんていう今の思想を認めない。』

それを彼は否定する。

『予言なんて曖昧なものに頼って、王を殺して救われる國に未来なん

て無い。彼女が現れる前の戦乱の時代に戻るだけだ。そこでそのまま滅び去るか、他の国にやられるかの2択しかない。』

光に閉ざされた世界で言う他の国と言うのが何を指しているのかは理解できている。

予言の子であるアルトリアを全否定する彼の言葉は、彼女のアイデンティティを完全否定するもの。

その言葉に憤りを感じてしまうのは当然のことだ。アルトリアはその使命を完全に間違っているとは思っていない。

『そんな方法、俺は認めない』

――だが、なんで自分がそんな使命を果たさないといけないのかと思っていたのは確かだ。

彼の女王を殺し、予言の子によって救われようとするこの國の行く末を否定する言葉は。

むしろ予言の子の使命を億劫だと内心で思っている彼女にとってははんの少しの救いでもあった。

アルトリアは別に使命に燃えているわけでもない。

かと言って使命を全否定するほどの心の強さも持っていない。

だから彼女は迷うのだ。

（本当にどうしよう……）

アルトリアは考える。

考えて考えて考えて考えて。

『予言が嫌なら……予言を否定するなら、私を殺せば良いのに。　それが一番早いでしょ？』

彼と交わしたさらなるやり取りを思い出す。

彼の宣言に対する疑問、突然の誘拐宣言に半ば自棄になったが故の自虐的な自分の質問に対する彼の答え。

そこに、いっそ楽にしてくれと言う感情があったことは否定できない。

その自棄に対しての彼の答えは、理想通りというものではなくて、結局のところアルトリアは死ぬこともできなければ答えを導いてもらう楽をすることもできなかった。

（トール君……）

それを思い出しながらも結局決意を固めることはできなかった。

（今は足手まといにならないようにしないと）

今は、もう、先のことを考えることは出来ない。まさに今、女王に逆らい危険を犯そうとしているのだ。

トールの介入ばかりに気をやって、足手纏いにでもなったら最悪だ。

＊＊＊

予想外の出来事が起こった。

それはカルデアにとっては追い風だった。
想像よりも手薄な警備。
なんとか撃退できた見張りの妖精。
ちょうど良いタイミングで現れた反乱軍達。
目的のマシュはいなかったものの。牧場にいた人間達を脱出させると言う善行を行う事が出来た。

反乱軍。

モルガンを打ち倒すと言う大義を掲げ、同じ志を持つであろう予言の子を持ち上げる為の下地を作っているのだという彼ら。
それはモルガンを打ち倒すとオーロラなどにも宣言しているカルデアの者達にとってはまさしく追い風だった。
この場での牧場での行いだけでない、これからモルガンを打ち倒すと言う目的においても、きっと役に立つであろう出会いである。
それを取りまとめるのが汎人類史では円卓の騎士の1人であった騎士と同じパーシヴァルという名前の男であると言うのだからますますその期待値は上がっていく。
悪の女王モルガンを打ち倒す正義の存在。
その代表がアーサー王の別存在であるのならば円卓の騎士は切っては切れない存在である。
敵も味方も定かではない異聞帯においてそれはまさしく希望の光。
だったはずなのだが。
それを、容易く打ち消すほどの存在が現れた。

「警備の隙を見ての襲撃とはな。小賢しい智恵だけは回る」

現れた炎の壁。
飲み込まれた反乱軍の人間達。
その一連の出来事は希望を絶望に変えるには十分だった。
新たな登場人物。

感じ取れる魔力はただでさえ圧倒的な妖精の中でもなお強力。

「この牧場はモルガン陛下の財産である。焼け野原にする事はできない。残りは我が角で潰す。抵抗するが良い人間」

白銀の甲冑。
見るからに巨大な体躯。
その相貌は人間的だが、存在感は格が違う。

妖精騎士ガウェイン。
妖精喰いの黒犬公。
反乱軍の1人が彼女の異名を語るものの。

「能書きばかりで剣を取らぬのであれば我が角と交えるまでもない」

最後に女王の懐刀と称した反乱軍の兵士はたった今殺された。

「ガウェイン様、逃げ出した人間どもは全て捕らえました」

またひとつ絶望が重なる。

目の前の反乱軍達が皆殺しにされた事だけではない。
脱出にあやかった牧場の人間達も結局捕らえられた。

「女王陛下から聞いている。男、おまえが汎人類史のマスターか。我ら妖精騎士は貴様らの事はみな陛下より賜っている――機会があれば捕らえよとな」

藤丸立香達も同様に処理されると思われたところで目の前の騎士から出た言葉は驚愕に値するもの。

この妖精國ではオベロンによって情報をもたらされた者以外は汎人類史の事を認識していないと思われたが、やはりと言うべきか女王に近しい者は認識しているらしい。
汎人類史である自分達を殺すのではなく捕らえろと命令されているという事に疑問を挟みつつ。
事態はカルデアの者達にとって最悪なものとなる。
どう言う能力か、令呪を通して魔力を奪われる藤丸立香。

「しっかり！だめだ、ひどく衰弱している！」

彼はカルデアにとってまさに要であり、例えそれを推してこの戦いに勝利しようと彼が死亡すれば終わりとなる。
彼を置いて目の前の騎士と戦闘など不可能。

「久しぶり。会いたくはなかったけど、またあなたに会うなんて」

一瞬、アルトリアとのなんらかの因縁があるような会話劇も始まったのだが。

「――知らんな」

容易く切って落とされた。
会話による引き伸ばしも終わり。
選べる選択肢は逃亡のみ。
その選択肢すら犠牲無くしては選べない最悪の状況。
瞬きしたその瞬間には全滅をしてもおかしくない。
そこに、一手を投じたのはもう1人の騎士だった。

「む、これは……弦、か？」
「いかにも」

汎人類史の円卓の騎士。
張り巡らされる弦は、妖精騎士を抑え、あわや打ち倒すための必殺の布石。
「それは自由自在にして縦横無尽。決して千切れぬ妖弦。貴方がどれほど頑強だろうとその弦を超える事は敵いません」
嘆きのトリスタン。
彼の投じた一手が、全滅という危機に待ったをかける。
「ダヴィンチ、アルトリア。ここは私が食い止めます」
彼が選んだのは自身を犠牲にした主の逃亡。
確実に全滅するこの状況において、自身を犠牲にするのが最善の手であると、彼はそれを選び取る。
戸惑うアルトリアを説得し、去ろうとするダヴィンチを背に、対峙するトリスタン。
この後トリスタンは妖精騎士ガウェインに敗れる。これが本来の運命
だが、その運命にわずかな綻びが生じることとなる。

＊＊＊

妖精騎士と円卓の騎士。世界を取り合う第一戦。
それが始まろうとしたその瞬間。

――ポンッ

場違いなほど小気味良い軽い音と共に、

「――！・これは？」

その場にいる全ての者の視界を奪う煙が唐突に現れた。

「――小癪な！」

「――今だ！」

鬱陶しげに声を上げたのは妖精騎士ガウェイン。

これ幸いと声を上げたのはレオナルド・ダヴィンチ。

互いに、煙幕の目眩し程度で動けなくなるようなタマでは無い。

だが、事態を動かすきっかけになった。

ダ・ヴィンチは何者の仕業かという思考を捨て、藤丸立香をアームで掴み、残りの２人は号令と共に一目散に逃走を図る。

視界はゼロ。だが足元の起伏具合と、出口までのルートならば把握している。見えずとも走り切ることはできる。

「――っ　舐めるなぁ！」

対してガウェインも何も動かないわけではない。

捕らえろとは言われたが傷つけるなとも言われていない。

目の前の弦の檻を無手で抜けるのは容易い事ではないが、剣を振るい、発生させる炎によって弦糸ごと広範囲で相手を薙ぎ払う事は難し

くはない。
殺してしまうという万が一を考えるがたかだか煙幕程度で取り逃したとあっては妖精騎士の名折れである。
大雑把な自覚のある自身の力を可能な限り調整し、剣と共に炎を振るう。まさに今それを実行しようとしたその瞬間。
「――ッ」
ガウェインの側に、わざとらしいほどに突如現れた、何者かの気配。
浮かび上がるシルエット。
煙で全容は見えないがわざとらしく現れたそれは四肢のついている人間のもの。腕を伸ばせば届く距離、ガウェインの横合いにそれは現れた。
（この私を暗殺でもするつもりか!?）
思考はすれど身体は反応出来ない。
気づいたところで、振りはじめた剣は止まらない。
言葉を発する暇もない。
狙った獲物を仕留める事はできるが、それによって生じた隙を消す事はできない。彼奴に鎧を貫く何かがあるのならばガウェインに攻撃が届いてしまう。
それがどうしたとガウェインは歯を食いしばる。モース毒を仕込んだ武器か、あるいは魔術的な何か、どのようなものであれ耐えてみせると心を決める。
そんな中、影がとった行動は横凪に振るわれた剣の腹を素手で下から叩き上げる事だった。
「何――っ!?」

煙の中きら見える拳。重苦しい金属音。

振るわれるはずだった一閃は上に弾かれた。

ある種予想外の一手。剣を手から離さなかったのは流石の妖精騎士とも言える。

影はガウェインを仕留めることではなく、攻撃を止め、先の汎人類史の者達を守ることを選び取った。

「不意打ちとは言え素手で私の角(けん)を弾くとはな。褒めてやる」

無手でそれを成し遂げたであろう目の前の人間らしき影に、賞賛を送る。

だが、それはそれとして目の前の下手人を許すつもりはない。

上に弾かれた腕と剣を、ガウェインはそのまま大上段の構えへと昇華する。

「だが捨て石があの男から貴様に変わっただけだったな」

放り損った炎は剣に溜まったまま。

元々加減するつもりだったそれをガウェインは遠慮しない。

「はあっ!!」

足元に伏せている影に向け、それを振り下ろした。

爆ぜる炎。

それは広範囲に広がり、煙さえも吹き飛ばす。

大地に向けられたそれは、地面を焼き尽くすものの周辺の建物の表面だけを焼け焦がすに留まった。

しかし向けられた爆心地はまさに地獄。人間であれば一瞬で灰になっているであろう威力。

その炎の最も側にいるガウェインは暑がるそぶりすら見せはしない。
放たれた絶対の一撃はしかし――
「……逃げたか。相当に素早いヤツだ」
下手人を捉える事は無かった。
感じない手応えに戦いへの渇望を募らせながら妖精騎士ガウェインは事態を冷静に分析する。
「逃げ出した人間とサーヴァントを追え、私はいささか足が遅い。足の速い者達を集め追跡しろ」
炎の範囲外、背後に控えた部下達に命令を下す。
「赤毛のサーヴァントには警戒しておけ、侮れば弦で四肢を失う可能性もある。取り囲んで動きを止める程度に抑えておけ」
先ずは、逃げ出した汎人類史の者達を追い詰めるための指示を出す。
「一部の者は周辺の散策を。唯一の逃げ道は侵略者どもが通ったあそこだけだ。空でも飛べなければ逃げきれん。この牧場のどこかに潜んでいる可能性が高い」
爆炎の風圧によって晴れた煙の先。牧場の門を差しながらさらなる指示を出す。
指示としては完璧だった。
あの戦力。足の速さ。それを加味しても全く問題なく捕らえられる状況。

――だが、誰の助けか突如現れた一部の上級妖精しか持たないはずの馬車によって汎人類史を取り逃す事になった。

＊＊＊

「……用意の良い事だ。あの馬車の持ち主はわかるか？」
「不明です」
「煙幕を出した者は？」
「建物中も探したのですが魔力の痕跡も無く。影も形も見当たりません」
「飛んで逃げたか、あるいは姿を消す類の力でも持っていたと言う事か、あの時わざわざ姿を見せたのは自信の現れとでも言うつもりか？」

取り逃した報告を受けるガウェイン。
さまざまな思惑はあるが逃げ出した者達はネズミですらない虫であると言い捨て、キャメロットに帰還することを決める。
途中、部下による妖精騎士ランスロットに対しての発言によって一瞬緊迫した空気が流れたがそれも終わった。
取り逃しはしたが戦いによって人間牧場を破壊する事もなく、奴隷の人間も収容した。結局のところ反乱軍が全滅したのみでむしろ汎人類史の者達の情報を得たと言う意味では女王側にとっては得のあった一件となったのだが――

事態はここから動き出した。

「ひ、ひぃ……！　待ってくれ、違うんだ、オレたちは悪くない！　アイツらが勝手に扉を開けたんだ……！　オレはイヤだって言ったんだ！」

叫ぶのは牧場に収容されていた人間達。
反乱軍によって脱出を促されたものの、結局のところ捕まった者達。
「殺さないで、殺さないで……！　もう二度と、自由なんて欲しがらない！」
その運命は決まっている。
――思い上がるな
その一言が最後。
――一度でも逃げ出そうと考えた人間は奴隷の価値もない
その理由と共にガウェインによって、忠実な黒犬（ブラックドッグ）へと変えられる。
それが、彼らの運命。
だが――
「思い上が「――おい」」
牧場の人間の末路を決定告げる妖精騎士ガウェインの言葉は最後まで紡がれる事はなかった。
「そいつの言っていた事は本当だ。断ったのを言いくるめられてただけだ」
運命を決める妖精騎士ガウェインの一言は、1人の奴隷の姿の男に

よって防がれた。

「そのぐらい許してやれよ。わざわざ殺すほどの事でも無い……」

「貴様！　奴隷の分際でガウェイン様に口答えとは！」

「反乱軍は全滅させた。侵略者の情報も掴んだ。アイツらは虫程度の認識なんだろ？　実質勝利だってのに自分で貴重な資源を減らして負け戦にしてどうすんだ。馬鹿なのか？」

妖精の警告を無視し、畏れることなく口を動かすその者は、このばにいる奴隷たちの運命を破壊する存在。

「貴様――」

わかりやすい挑発行為。

妖精騎士ガウェインの纏う空気が一変する。

その者は命乞いをした者と同じ、奴隷の服を着込んでいた。

「そもそも恩知らずの反乱軍の薄っぺらい思想に乗せられかけたのは、教育不足のお前らが悪い」

「貴様、自分の立場をわかっているのか？」

この場にいる誰もがその男を見る。

奴隷や、妖精達でさえその挑発行為に絶句する。

「俺の立場とお前が思わず声をかけたくなるくらい馬鹿なのは関係のない話だろ？」

「お、おいアンタ！　なんて事を!!」

恐れるのは男ではなく、その挑発で激昂するかもしれない妖精騎士に対してのもの。
ガウェインに罰を与えられそうになったその男でさえ更なる恐怖に男を静止しようと焦りを見せる。
「わざわざ殺すならモース対策の肉壁にでもした方が良いだろ。人間ってのは確かに無価値どころか害悪だが、使いようによってはお前みたいな馬鹿の判断で殺すなんて勿体無い程度には理はある。教育次第じゃ――」
だがその男は数多の妖精や、妖精國最強の一角を前にしても臆する事はない。言葉を止めることもしない。
「お前の連れてるしけた犬畜生より役に立つ」
しんと辺りが静まり返る。
誰も動けない。動こうとしない。
こに妖精騎士が発足それてから数百年。果たしてここまで妖精騎士に暴言を飛ばす者がいたのだろうか。
恐れ慄く奴隷と妖精は前代未聞の珍事にガウェインの動きを待つ他ない。
「――成る程」
その静寂の殻を破ったのは妖精騎士ガウェイン。
あわや激昂してこの場の全てを燃やし尽くすと思われた騎士は。
「おい、拘束を解いてやれ」
「は？　ハ！　只今！」

何故かそんな事を言い出した。

腕の拘束を外す土の氏族の妖精、ガウェインは首を振り、男を移動させるよう促す。

腕に何も付けていない男はスタスタと移動する。

誰もが男が見逃されるとは思っていない。

これから起こる惨劇を想像し、激昂した妖精騎士によってより残虐な方法で自分達もまとめて殺されるのだと絶望に染まる。

妖精に突き飛ばされる男は、たたらを踏むことも無く歩き、大した不安も見せずに彼女の正面に立つ。

数メートルの距離を挟んで相対する両者の距離は先の騎士同士の戦いの距離感と同じ。

決闘の様相を呈していた。

「確かに教育不足だった」

ガウェインの言葉にどよめく妖精や奴隷達。

「へえ、非を認める知能はあるんだな。」

尚も挑発を続ける男にどよめきがさらに広がっていく。余計な事をするなと、懇願の目を向ける。

「――フ、魔力も持たん失敗作であれば力の差を察することもできんのは致し方のない事だ。女王陛下や妖精騎士がどういう存在か。ここの管理者に言って奴隷どもに叩き込むよう聞かせねばならんな？」

「え？　あ、そうだった。あーまあ、アンタのことは知らないが女王の偉大さは感じてるよ。　全知全能の神でもないのにこの偉業。とんでもないお方だ。だが流石に多忙の身なんだろうな。末端の無能な配下の教育までは頭が回らないのは仕方がない」

「ほう、下等生物である貴様らにも陛下を敬う程度の知能はあるのだ

な」
「ああ、お前よりはよほど女王様の偉大さを理解してる自信はある」
「フ、笑わせる」

男の挑発を受け流し、ガウェインは嘲笑で返す。
舌線はこれまでと、ガウェインは鎖で繋いだブラックドックを前に出す。

「この者達を守るために前に出た気概は認めてやろう。その下らない言葉ばかり出る舌は問題だがな」

「おい、勘違いするな。生存競争に負けた以上人間が奴隷にされるのは当然だ。人間はもっと酷いことをしてきてる。むしろ妖精は優しいぐらいだ」
「ほう、人間の命そのものには興味はないと？　この奴隷どもを救いたくて声を上げたのではないのか？」
「別にそういうつもりで口出したつもりはない。お前の行動が無能すぎて女王が不憫だったから見てられなかっただけだ。憐れに思ったのは奴隷じゃ無くてお前らだよ。」
「……私の前に立つ胆力は認めてやる。だが奴隷どもへの関心を逸らすための挑発だと想定したとしても、驕り高ぶったその態度は問題だ」
「敬ってほしいならそうしたくなるような態度をとるんだな」
「フン、教育を施すのにも労力はかかるということだ。逃げ出そうと考えた者はその時点で奴隷の価値すら持たん……そのような者どもに労力を捧げるのも馬鹿な話だ」

すっとぼけた男の態度を無視し、ガウェインは黒犬の鎖を外す。それはいかなる意味なのか。この場で察せない者はいない。
「この奴隷以下共がブラックドックよりは役に立つと言ったな？　小

僧」

牙を剥く人間並に巨大な黒い犬。その筋肉質な四肢を曲げ、腹を地面に付ける。獲物を襲う前動作。

「貴様の見解が思い上がりでない事を証明して見せるが良い」

それが号令。

ブラックドックは折り曲げた四肢を引き伸ばす。バネのように躍動する体は悍ましい速度で以って、男へと飛び掛かる。

目の前で起こる絶対的な破壊を妖精達はショーとして楽しもうと笑い、奴隷達は男の後にはきっとあの犬に食い殺されるのかもしれないと悲鳴を上げる。

空気を突き破る黒犬の突進。牙と爪を備えたそれはもはや鋭利な斬撃力を所持した砲弾だ。

妖精ですら上半身を消し飛ばすであろう威力のそれは。

――凄まじい衝撃によって終わりを迎える。

それは拳だ。

斜め下からの振り上げ。

美しい曲線を描くアッパーカット。

放ったのは無様に肉片になると思われた奴隷。

砲弾と化したブラックドックを避けるでもなく、何らかの奇策を講じるでもなく、下から迎え撃つ形で鋭利な牙に直接拳を叩き込んだ。

爆音、爆風。

牙と骨の砕ける音がそれに混ざる。

その勢いは凄まじく、牙を砕き切っても止まることはない。
吹き飛ばされた黒犬は突風を撒き散らしながらガウェインの頭上を超え、その背後にある宿舎の上階を破壊し、果てはその先の城壁を破壊し、牧場の外。
落下音すら届かない遥か彼方へと吹き飛んでいった。
遅れてきた衝撃による突風が奴隷や土の氏族の妖精をふらつかせる。
驚愕する一同。
「――悪かった。あんなに脆くて弱いとは思わなかった。吹っ飛ばしすぎたよ。想像以下だったな。お前の駄犬」
目の前で起こった出来事を理解することが出来ないのは妖精も人間も変わらない。
「で？　今度はどうする？　ここにいる妖精を全員屈服させれば良いのか？」
目の前の男の凄まじい力と、訳の分からない宣言にたじろぐ一同。
男の力に、嘲笑っていた妖精たちでさえ無礼な男の強気な態度に臆し始めた。
それも当然である。
土の氏族も奴隷達も、ああしてブラックドックを退ける者は存在しない。
1翅を除いてだが。
「――フッ」
今の男の力に一切動じない妖精が一翅。

「良かろう」

妖精騎士ガウェイン。

「ああ全く――はしたないことだが。あの虫どものおかげで激った熱を持て余していたところだったのだ」

妖精國を守る最高戦略の1翅。

その迫力は強靭強大。先の黒犬など比べるべくもない。

「激った熱の発散先がこうして現れるとは、感謝せねばならん」

獰猛な獣が牙を剥く。

「よくぞブラックドックを退けた。人間の分際で、さらに矮小な魔力で良くやったと褒めてやろう。奴隷どもは見逃してやる。だが――」

「――!?」

目の前の人間とは思えぬ異常を前にしても尚、動揺する見せず、二足歩行のその獣は角(つるぎ)を構えて男へと肉薄する。

「次は私に付き合ってもらうぞ！異邦の男よ」

「――!!」

振り下ろされる剣を、拳で挟んで白羽取る。

巻き起こる衝撃波が再び妖精と人間達の肌に痛みを与える。

ブラックドックを吹き飛ばした男も余裕だった態度を崩し、ガウェインの一撃を止めるために力を籠める。

互いに歯を食いしばるほどの力の入れ様。

「先程と良い！　その矮小な身と魔力で武具も持たずに私の一撃を受

け止めるか！　興味深い！」
「楽しむのも結構だが！　そんなんじゃ負けた時恥ずかしくなるぞ!?」

ぶつかり合った力が反発し、その衝撃が互いを弾き、間合いを開ける。
拮抗する力。その衝撃はこの場にいる誰も抗えない。
されどどちらも全力にあらず。

「殺しはせん。味見程度で済ませてやろう。先ほどの奴らと違い陛下に謙る心待ちのようだがその態度はいけすかん。逆らえんように調教した後貴様を捕らえ陛下に献上しよう。」
「それは願ったりだが立場が気に入らないな。お前が俺に平伏して女王様に紹介してくれるんなら従ってやっても良い。働き始める前の妖精國漫遊ツアー付きでな。　馬車を用意してもらおう。引くのは馬じゃなくてお前だけどな」
「――ハッ」

互いに口を開くのは余裕の表れか。

「抜かせ！」

ガウェインの方向の後、再び激突。
運命の歯車を壊す衝撃は果たしてこの妖精國にどれほどの影響をもたらすのか。
奴隷に扮した記憶なき異世界の男トールと、妖精騎士ガウェインの本人たちにとっても予定外だった戦いの火蓋が切って落とされた。

１４００万６０５回目

『カマー・タージ』

ネパールのカトマージにある何の変哲もない寺院。
いるのは格闘技の型の鍛錬をしている僧侶達。
それだけを見ればなんの少し変わった修行風景と言うだけなのだが、型を演じる僧侶達の手の先にはオレンジ色の光が灯り、幾何学的な模様を浮かび上がらせている。
また別の集団を見れば何やら輪が二つ繋がった指輪を左手指につけた者達がそれを前に掲げながら右手で空中に円を描いていた。
その円の動きに答えるようにみるみるうちにオレンジ色の光の線が空中にどこからともなく現れ弧を描く。
その輪の中に、目の前の風景とは全く異なる情景が映し出された。一人一人様々な風景が見えるがその内の１人の少女が描いた穴からは真っ白い風景が窺える。
円の中に見える白い風景。吹雪吹き荒れる雪山は映像の類かと思われたが、驚いた事に映像の中の吹雪が輪を通して吹き込んできのだ。
輪を描いた者がモロに吹雪の直撃を受け、溜まらず慌て始めだと思えばその光の輪は閉じ、吹雪は止んだ。
残るのは真っ白くなってしまった術者であろう少女。
咳き込んで寒そうにする彼女を見て朗らかに笑う者達。
これぞまさに異常。
あの光の輪の起こす現象は常識で測ればあり得ない事態のはずなのだが、近くにいた僧侶達が彼女に称賛の声を送るのみ。対する少女も気恥ずかしげである。
空間と空間を繋ぐという大偉業を前にして、そこに関しては全く動じない。
そんな、異常が日常となっているカマー・タージ。
それもそのはず。

何を隠そう彼らは魔術師という、奇跡を起こす者達である。
魔術。
カマータージでは別名ミスティックアーツと呼ばれるそれは、マルチバースと言う多元宇宙や別次元へと繋がり、強力なパワーを引き出すことで行使する奇跡。
先程の弧を描く光はゲートウェイ。
この星のみならず銀河を隔てた先の空間や別次元にすら道を繋ぐ魔術の一つ。
彼ら魔術師はその力を行使し、さまざまな者が想像しうるありとあらゆる奇跡を自由に行使する集団である。

とある世界にも魔術師と呼ばれる者はいるが、彼らのルールに乗っ取って語るのであれば、別次元へと繋がる事がスタートラインであると知れば発狂しかねないその魔術。
そんな彼らの目的は、別次元からの脅威に備え、世界を守る為に魔術を行使する事。
世界が違うが故に目的もその体系も異なる彼ら。
とある世界での魔術師の最終目的地、あるいはその目前に到達しなければなし得ない別次元への干渉を、基礎の一歩目とするこの世界の魔術師達は果たしてどれほどの異常なのか。

――だがそれは果ては世界の為に魔術を使うという大いなる使命と、別次元からの脅威と言うリスクと引き換えに手に入れた力なのかもしれない。

そんなカマータージにて修行する魔術師達の中に一際目立つ格好をする者がいる。
細身の男性だ。

３０代程だろうか、その顔立ちは整っており、わざと生やし整えられた髭は、どちらかと言うと髭などを生やそうとしない者達の多いカ

マー・タージの中では風変わりの様相を呈している。
なによりも違うのは、肩から広がっているマントである。襟立てられ、足まで届く程に長く赤いマントはフィクションにありがちな魔術師然としすぎていて僧侶達の中では浮いていた。
彼は今、カマータージのとある部屋で1人、空中に胡座をかきながら光幾何学模様の光をその手で摘みとりながら腕を振り上げ、虚空を描きながら何やら空中を見上げていた。
その視線の先には大小様々な光が灯っており、その様は宇宙そのものを想起させる風景だった。

「どうだストレンジ」

マントの男の後ろから先程のような橙色の光が弧を描く。
ゲートウェイの中に男が1人。
黒髪短髪のふくよかな男性だ。ストレンジと話しかけられた男とは違い、マントなどは付けていないがその法衣には様々な装飾が施されており、特別な立場の人間であることが窺える。

「ウォン。どうもこうもない、未だ状況はは変わらず。そこらの石ころでも見つめていた方が有意義だろうさ」
「アベンジャーズは？」
「解答は変わらない。ここ最近は連絡もない。ここのＷｉ―Ｆｉが故障してなければだが――」
「Ｗｉ―Ｆｉは動いてる。さっきドラマを見ていたからな」
「……また、裁判友達とか？」
「ノーコメント」

ストレンジと呼ばれた男はなんとも言えない表情で空中の星々を刺す。
「ご覧のとおりまた力が発動した。力の波動もコードも同じ」

その言葉と共にストレンジが手を振り上げれば、宇宙空間のような何かに緑色の光が灯った。

「やはりこれはアガモットの眼――タイムストーンの力か……」

「間違い無い」

「ドルマムゥの時のように時間を繰り返させているのか。やはりコレは――」

「ヤツのためのマルチバースを渡る実験によってコードは計測済み。科学的な観点で見てもトニー・スタークやブルース・バナーの解答では黒だ」

言いながら緑の光に隣り合う赤い光を視線に入れる。

「……サノスを倒した後、キャプテン・アメリカーースティーブ・ロジャースが石を返しに行ったのとアイツが異世界へと帰る為に世界を渡ったのはほぼ同時期だった。世界を渡って奪いに行ったと言う事は？」

「別の宇宙で手に入れたと仮定する方が可能性は高いだろう。どちらにせよ良いことじゃない」

会話の間にまた一度光が灯る。

「こちらからコンタクトは取れると思うか？」

「無理だ。反応は掴めても無限にあるマルチバースの中でもさらに最奥の繋がるはずもない世界だ。ターミネーターの世界にジェダイの

騎士はやって来ない。場所を絞るだけでもエネルギー不足だ。宇宙が生まれる程の莫大なエネルギー放出が向こうで起きれば別だが――」

その言葉を口にだした瞬間、異常と言うには弱く、無視が出来ない程に強い風が流れる。

それは果たして空気の循環によるものなのか。

「今、俺は予感のようなものが走ったんだが」

「よせ、口に出さないほうが良い事もある」

お手上げだと言わんばかりのストレンジ。

だが、ストレンジの言葉にウォンと呼ばれた男性は何かが引っかかるように顔を顰める。

「トールはどうやってタイムストーンを手に入れた？　ヤツの世界にそんなものが無い事は確定済みだ。彼女と彼女の世界を確実に救う為の保険だとしても他世界からインフィニティストーンを奪うなどあってはならない事だ。下手をすると残りの――」

その先をウォンは口にしなかった。する必要も無かったとも、恐ろしくてできなかったとも言えるその反応に、ストレンジは頷きで返す。

「何にせよ、時が動いている以上アイツの望みは達成出来ていないと言う事だ。こちらに影響が及ぶ事はないが、認識できてる以上、他の世界よりかは繋がる可能性が高い。放置すべきか干渉すべきか……」

「マルチバースを渡る力。そうなってくると――」

「――スティーブン！　ウォン！」

ガタンと、2人の緊迫した部屋の空気を破壊しながら、大きな音をたててドアが開かれた。
開いたのは1人の少女。先程吹雪が直撃した少女だ。
「できた！　ゲートウェイで次元の扉を開けたよ！　マルチバースのポータル程自由には出来ないけど――」
と、はしゃぐ様子を見せながら2人に近づくがその2人の深刻な雰囲気を察したらしい。快活な表情は収まり気まずそうなものになった。
「あ～、お取り込み中？」
言われストレンジは空中にあぐらをかいたまま振り返る。
「構わない。もうゲートを開けたのか。やるじゃないか」
「ああ、どこかの誰かよりも早かったな」
「えへ、ありがとう」
2人の素直な反応が意外だったのか。訝しげな視線を送るストレンジと悪戯小僧のような表情をするウォンを尻目に、思いの外恥ずかしそうに笑う彼女。
それも束の間、その快活な視線はストレンジの背後にある赤と緑の点に関心を向けた。
「この点って何？　何かの信号？」
言われ2人は顔を合わせる。

ほんの少しの逡巡。
その後2人は頷き合い、ストレンジは口を開く。
「初めて会った時にマルチバースの話をしただろう」
「ビザを食べさせてくれた時の？　あ、まさかこの信号ってお尻から蜘蛛の糸を出す人？　確かスパイダーマン」
「違う。スパイダーマンでは無いし、尻から糸は出さない。今のところな」
「それなら誰？　あ、確かもう1人いたんだっけ？マルチバース関連の人。確か……フラッシュ！」
「まあ、間違いじゃない。君と同じ。異世界から来た男だ」
「この世界から出て行ったんだよね？元の世界に帰れたのかな？」
「さて。私達にわかるのはまだアイツが生きているという事と、今まさにタイムストーンを使用して何かを企んでいる事くらいだ」
「タイムストーン。時間を操る凄い石だよね。宇宙を滅ぼしかけて、救ってくれた石。魔術師達が守らないといけなかったもの」
「ああ、今アイツは時間軸を繰り返して何かを成そうとしているようだ」
それを聞いた少女は、驚いた表情を作る。
「そういう大事そうなこと私に教えて良いの？　こう言うのってエライ人達だけで内緒にしておくのが普通なんでしょ？　ドラマで見たよ」

「……君もテレビっ子か」

呆れた表情のストレンジにしたり顔でウォンが口を出す。

「アメリカ・チャベス。カマー・タージではやってはいけない事はあるが知る事は禁じられてはいない。遠慮は不要だ」

アメリカ・チャベスと呼ばれた少女はウォンの言葉に笑顔を向ける。

まるで家族のような3人のやり取りの中。

緑色の点の光が強まり、また収まった。

「時がまた戻された。乱暴な術式だ。時空を壊さない為の安定に寄りすぎて術者本人への負担がまずい事になっている」

「確かに奴は頑丈だが繰り返し過ぎればどういう影響が出るかわからんぞ。それは理解しているはずだ。」

「それって大丈夫なの？」

「いいや大丈夫じゃない。時空がねじれて時が狂ってしまう負担を体で受け止めている。言葉で言ってもそれがどれほどの物かは実質わからない、その負担はきっと身体だけでは収まらないはずだ。彼はタイムストーンを自由に操れるほどの力があるわけではない。優秀な相棒はいるが別の世界の魔術師である以上限界はある。ヤツ自身も、彼女もそれはわかっているはずなんだが……」

「なんでそこまで？」

言いながらもどこかで理解もしているような表情の少女。

「愛する者と愛する世界を救う為――」

一つの解答を口にしたストレンジ。疑問を投げたアメリカはその答えに複雑な表情を作り出す。かく言う彼女も、とある1人の人間の愛による行動をきっかけにこの世界にやってきた口なのだ。愛故の行動の尊さと愚かさを、彼女は経験している。

「……助けに行ったりはできないの？　私が手伝えば――」

「危険だ。下手に繋がればこの世界にどういう影響が及ぶかは分からない。それに世界の特定も困難だろう。情報はこの宇宙の大釜を応用した見取り図だけ。これを見て君はどこに行くべきかわかるか？」

首を横に振ってアメリカは困難である事を明示する。

「――でも」

彼女の納得のいかない様子は彼女自身というよりも、今目の前にいる彼らを気遣っているようにも見える。

「なに。アイツもある意味同期で…この星を護るために戦った仲だ。出来る限りの事はしよう。反応があると言う事はまだ無事だと言う事だしな」

ストレンジのその表情に彼女は笑顔を返す。

「ストレンジ。あいつは今何度目のやり直しだ？」

そんなやり取りの中、ふと繰り出されたウォンの問いにストレンジは何か運命めいたものを感じながら答えを返した。

「１４００万６０５だ」

＊＊＊

――人間牧場侵入の前日

記憶に確かに浮かぶ夥しい程の戦闘経験。
数えきれない程の人間や怪物達との闘い。
およそ自分の常識の外にある訳の分からない絵物語のような戦い。
思い出したそれは間違いなく確かなものだ。
これまで生き残れたのは、もとより強靭な肉体だけでなく、鍛え上げた故の頑丈さだったらしい。
所作、たたずまい。その全てに力がみなぎるのを感じる。
腕を枕にして仰向けに寝ながらとある録音を聞いていた青年。
トールは、スイッチを切った端末を持ち上げる。その瞬間手に吸い込まれるようにその端末は消え去った。
そんな不可思議な現象にトールはなんの疑問も持たずに腕を上げ、右手にあるリングを見つめ。

「なあ、本当に俺の記憶は教えてくれないのか？」

まるでリングに対して話かけるように口を開いた。
何に対して話しているのか。独り言のように思えるそれは、実際はしっかりと相手が存在していた。
『言っただろう――』
リングそのものから音が出る。
そのリングは、まるで液体のように形状を変えていく。

『自分で思い出さなければ意味がないと……』

出来上がったのは女性のカタチ。

輪郭はあっても瞳が無い。形状だけを型どったヒトガタだ。その液体も色は銀に光っており、およそ普通の液体とも思えない。

そのヒトガタは掌の上に乗ることができるほどに小さかった。

「でも教えてもらえばそれがキッカケになって思い出す事が出来るんじゃないか？　よくあるだろ？　そういうの」

仰向けになっているトールの胸の上にチョコンと乗る彼女。小人故の儚げな雰囲気を纏わせながらも、背筋は伸び、威厳を感じさせる佇まいがあった。

『知ったところで過去の自分という他人としか認識できぬ。その認識は記憶を取り戻した時のノイズとなり得る。記憶が戻ったとしても一度自分ではない何かと言う認識を覆すのは難しいものだ』

「じゃあ俺とＶ２Ｎがどうやって出会ったとかも教えてくれないのか……」

「……知らねば信頼ができないか？」

どことなく、落ち着かない態度に訝しげな空気を全身に纏った小人の女性、Ｖ２Ｎと呼ばれるそれは、不満げに呟いた。

「いやそうじゃない。信頼はしてる。俺は君を信じきってるんだ。理屈じゃ無い、きっと魂とかそう言うレベルでの話なんだろう」

『……ふん、記憶を失ってもそういうところは変わらないな。である

ならば何をそんなに浮ついている』

トールの言葉にどことなく、高揚した雰囲気を纏いながら問うＶ２Ｎ。

「さっきその女の子の見た目以外に、機械っぽい見た目になっただろ？　それの姿とか名前のセンスとかあの世界の、いわゆるドロイドって奴らっぽい感じなんだけど」

『ほう？』

「俺の世界の事と、異世界を巡ってきたこと自体はなんとなく覚えてるんだ。だけどそれが本当の世界なのか、ドラマとか映画とかでみた物語の世界なのかの区別がつかないんだ。あの世界は現実でそこで出会ったとか無いかな？」

『さて、どうだろうな？』

Ｖ２Ｎの返しに、仰向けになっていたトールは上半身を上げる。胸に立っていたＶ２Ｎは傾いた大地に臆さず、そのままトールの膝上へと着地する。

「なんだよ、教えてくれよ。実は俺も使えたりするのか？アレ……フォー……とかブオンブオンするやつとか……」

『教えないと言っただろう？』

「……どうすれば教えてくれる？」

『くどい。自分で思い出すしか無いと言ったろう』

「ちえーっ」

『普段しないような言葉を使うな。気色が悪い』

再び腕を枕にしながら仰向けに寝るトール。

「俺の力もこれが全部じゃ無いってこと？」

『ああ、お前の力はこの程度のものでは無い。だがそれも自分自身で思い出さなければ意味は無い』

「そこらへんが困ってるんだ。自分の強さは何となくわかってきたんだけど、思ったよりも動けなかったりするんだよ」

「それが認識と言うものだ」

言われ、何を考えているのか右手を上げ、自身の手の甲を見つめるトール。

「ふーん……まあ今の段階でも妖精に襲われても返り討ちにできそうだから良いか……」

『驕らないことだトール。妖精も人間と同じ。種族間でも力の優劣は存在する。余計な戦闘は避けなければ。特にこの國で騎士の称号を得ている類の妖精にはな。昼のようにそこかしこに喧嘩を売るな』

「わかってるけど、何か我慢ができないんだよ……」

『記憶の齟齬ゆえだろう。精神の我慢強さは経験に基づくモノ。だがそれを言い訳にするな、そこをどうにか抑えろ』

「でもピンチになったらなったで過去のことを思い出してスーパーパワー復活！なんて事もありそうじゃないか？」

『くどいぞトール。危機に陥った段階で、奇跡以外に頼るものがないなど愚の骨頂だ。その時点で命は無いと思え。』

「……わかった。喧嘩は売らない。なるべく戦闘にならないようにするよ」

『なるべくでは無い。絶対にだ。明日の人間牧場もだぞ？』

「わかったよ」

＊＊＊

『そう言ったのに……』

「ムー！ムー！」

『何度も忠告したと言うのに……！』

「ど、どうしましょう。Ｖ２Ｎさん」

『何をやっているのだあの馬鹿は……っ!!』

人間牧場。

立ち並ぶ奴隷たちの住居の隙間に、２つの影があった。

１人はボロボロの蝶のような羽を生やした少女だ。

彼女は手に持っているリングに焦るように声を出す。

『記憶があろうがなかろうがこう言うところは昔から変わらぬ！』

「ムー！　ママミメー!!」

リング、Ｖ２Ｎから出る激昂ともう一つの声にビクリとする少女、ホープの脇には帽子を被った同い年ほどの少女が１人。

猿轡をされ、手足を縛られていだ状態で横にさせられていた。

「ア、アルトリア……！　その、Ｖ２Ｎさん、アルトリアを解放しちゃダメですか？」

『ならん、拘束してもこの喧しさだ。解放してサルのように暴れられても困る。』

「まめままむまーーー！」

『黙れ!!　これ以上喧しくすれば奴らに場所が割れる！　見つかりたくなければ大人しくしろサルが！』

「まままもうまむむまいまん（あなたもうるさいじゃん）……」

『……やはりこいつをあの場に投げ飛ばすか。その隙にトールを回収する』

「もっ……!?」

「だ、だめですよ!!」

建物の隙間にて響く３つの声は、どういう理屈かまるで隠れている自覚がないかのように響き渡る。

だが、不思議なことに、広間の者たちはもちろんの事こと、周辺を散策する妖精達の耳にも届かない。

『……くっ、どうする……っ！　』

そのような不思議な現象を気にすることも無く。苦虫をかみつぶしたような声が聞こえる。

気付かれないまま声を出す銀の少女の視線の先。

そこには2つが重なり一つの巨大な影になっていた。

それは、巨大な女性に首を掴まれ、持ち上げられている青年の姿。

それは、青年、トールの敗北を語るには十分な情景だった。